

# マラルメの『言語の科学』

佐々木 滋子

## 目 次

### 一、『作品』の構想の発展

一八六六年（『作品』の最初の構想）

一八六七年（『作品』の第二の構想）

一八六八—七一年（『作品』の第三の構想）

### 二、『言語の科学』

1、はじめに

2、『言語の科学』の方法

虚構

音声言語  
ボクソール

文字言語  
エクリチュール

「言葉」  
ヴォクシオン

一般文法と修辭学

3、『言語の科学』と歴史・比較文法

音論の影響

歴史・比較文法からのずれ

歴史・比較文法との対立

三、結論

凡 例

- 一、原テキストで大文字で始まる語は、訳文では「」でくくって示した。
- 二、原テキストでイタリック体の部分は、訳文では傍点を打って示した。
- 三、訳の都合上字句を補った箇所は、( )に入れて示した。
- 四、原テキストでスモール・キャピタル体の語は、訳文ではゴチック体で示した。

「マラルメの『言語の科学』という題を付けたものの、マラルメにこの題名で呼ばれる著作があるわけではないことを、まずお断りしておかなければならない。「言語の科学」(La Science du Langage)という語は、ブレイヤード版マラルメ全集にして五頁弱の、ある断片的ノート(以下『ノート』と記す)の中に見出されるものである。<sup>(1)</sup>この『ノート』は、マラルメが言語学で博士論文を書くという計画をたてて、当時勤務していたアヴィニョンのリセを一年間有給休職していた、一八七十年の前半に書かれたと考えられるもので、今日ではそれだけがこの計画に直接属す

るものとして残っている。この計画もまた、彼の他の多くの計画がそうだったように、実現されなかったのである。マラルメの言語学的著作としては、その他に主として一八七十年代後半に書かれた『英語の単語』を始めとする何冊かの教科書がある。それらは、青少年を主たる読者対象とする教科書である点、英語のモノグラフィである点などで、一八七十年に計画された多少とも専門的な論文とは、性格を異にしている。だが、そこに読まれる当時としても特異な言語観は、それらが一八七十年に計画された言語学研究によって規定されていることを、はっきりと示しているように思われる。そこで、主としてこの二種類の資料に基いてこの時期のマラルメの言語理論の概略を示すこと、それが本論考の目的である。

確かに、このような試みには胡散くさいものがある。なにしろ問題の計画たるや、計画のままに終わった代物なのであり、言わばマラルメの思考の中にしか存在しなかったのだ。そこに照明をあて、概略的にはあれ一つの形を与えようとするのは、結局放恣な空想を弄ぶだけに終る危険を常に妊んでいる。それにもかかわらずそうした試みを敢えて行おうとするのは、この問題の計画が、単に学位論文のみを目的としていたのではなく、一八六十年代後半に構想された彼の『作品』の一環としても位置付けられていたからである。後述するように、この計画にとって学位取得は二次的な事柄にすぎなかった。この計画がマラルメに興味を寄せる人々の注目に値するのは、『作品』の構想がそれを必然的に要請したという事実によるのである。実際、マラルメの場合には、彼の詩人としての生涯全体を決定しさえればまた喰い尽くしたこの『作品』、それ自体もまたついに実現されることなく終ったこの『作品』の夢、それこそが全ての淵源となつていたのである。だから、具体的な作業に入る前に、まずこの『作品』に目を向けるべきであろう。

## 一、『作品』の構想の発展

## 一八六六年、『作品』の最初の構想)

マラルメが大文字の *Œuvre* 『作品』と呼んでいるものを構想するに至った直接の契機は、一八六五年冬から翌六六年春にかけて、詩篇『エロディアド』執筆中に会った虚無の体験に求められる。この体験から引き出された「われわれは物質の空しい形態にすぎない」という徹底した唯物論的認識は、マラルメを絶望させる。だが、その絶望の中で既に彼は、この虚無と戦うための唯一有効な武器は言語を置いて他にないことを直観するのである。

私たちは物質の空しい形態にすぎない——けれど、神や魂を創出しえた程に至高な形態なのだ。それ程に至高なことから、友よ！私は自らに物質のこの芝居を上演してみせ、物質であることを意識しつつも、「夢」の中に、もちろん物質の方ではそんなものが存在しないことは先刻承知だろうが、狂ったように身を投じ、太初以来私たちの裡に積もり重なってきた魂やその他あらゆる神聖な印象を唄い、真実に他ならない無を前にして、この栄光ある偽りの数々を高らかに語ろうと思う！これが私の詩の本のプランであり、その題はこうなるだろう、「偽りの栄光」もしくは、「栄光ある偽り」<sup>(3)</sup>。

人間は、物質の一現象形態でありながら、言語によって、物質にはいかなる基盤も有さない観念を創造することができる。この点で、人間は、物質の法に拘束されて虚無に沈んでいるだけの物質の他の一切の形態から異なっているであり、そこにこそ人間の至高性——虚無からの自由——は見出される。こう語ることによってマラルメは、人間を

人間たらしめている根本は言語による観念の創造にあることを、直観的に把握したことを示す。確かに、それはまだここでは詐術（「偽りの栄光」、「栄光ある偽り」）としてしか捉えられていない。だが、この直観的把握によって、マラルメは、以後一切の主知主義的思考と完全に袂を分った立場から、言語を見つめることになるのである。確かに、そのような立場に身をおくことは、彼にとって決して容易なことではない。それは精神と肉体との危機をすら呼ぶことになる。しかし、まだマラルメは、自らの直観が彼をどこに導いたのかを十分正確には認識していない。この時期のマラルメは、いわば、直観が彼を導いたこの「未知」の視点が開示する景観に目を奪われて、一歩も進まぬうちに既に殆ど恍惚となっている旅人なのである——「実際、私は今旅をしている、とは言っても『未知』という地方をだ。だから、酷熱の現実を逃れるために好んで寒冷のイメージを喚起するなら、こう言ってもいい、この一ヶ月来、私は美学の最も純粹な氷河の中にいる——『虚無』を見出した後に『美』を見出したのだ、と——だから、私がどんなに澄みきった高処に敢えて足を踏み入れているか、君には想像もつくまい」。

ひとたび虚無をくぐりぬけた以上、（私の精神は永遠なものの中で死に、その慄きを味わった）以上）もはやこの見出された「美」が、自然の中に存在するものでも、また美の純粹観念でもないことは、明白である。もし前者であるならば、それは「物質の空しい形態」にすぎないであろうし、また後者であるならば、それは「存在しない」ものであろう。この美は、詩が——言語が——二次的に創造するものなのである。当時の書簡に読まれる「詩についてかつてなされた最も偉大な書物（の一つ）に導くだろう美学の研究」という表現は、そのことを確認させてくれる。永遠なものとしての物質という虚無から人間を自由にする唯一有効な武器は、言語による観念の創造である。それは、「精神の最後の筐の宝石でできた鍵」である。そして、この鍵によってその筐を開けること、人間の人間たる根本の故以である言語による観念の創造の「神秘」を究めること、それがマラルメの言う「美学の研究」である。ここで注

意しておきたいのは、マラルメがこれらのことをあくまでも詩人として——実践する者の姿勢で——語っているといふことである。この姿勢は、今後も一瞬たりと放棄されることはない。したがって、この「美学の研究」もまた実践を通してのみ追求される。「作品」は、そこに与えられた名称なのである。「私は壮大な作品の基礎をすえた。〔…〕私は死んで、精神の最後の筐の宝石でできた鍵をもって蘇ったのだ。今は、あらゆる借物の印象のない所でそれを開けるばかりだ。その神祕は全く美しい天空に〔初めマラルメは『全く美しい作品に』と書いている〕発散してゆくだろう。〔…〕今全体的に素描している私の『作品』は、私が生きていけば壮麗なものとなることができる。私が言っているのは、夢想家の詩的存在を構成する文学的作業総体のことだ。結局それがその人の作品と呼ばれるのだ。〔…〕私は実に美しいものを作ることができる！それはまだ夢だが、しかし、私の裡で夢見られ、私がそれになるのだ。〕<sup>(7)</sup>

一八六六年の段階で構想されていた『作品』の内容を最も具体的に語っているのは、六六年十二月二十日付アルマン・ルノー宛書簡<sup>(8)</sup>である。そこでは、『作品』は『エロディアド』と『詩の美学』から構成されている。既に、『作品』のこの初期の構想において、言語は中心的な位置を占めているのである。

### 一八六七年（『作品』の第二の構想）

だが、こうして確定したかに見えた『作品』の構想は、すぐにも揺らぐ。翌六七年五月中旬に、数ヶ月の沈黙を破って書かれた書簡は、『詩の美学』ではなく、「虚無の精神的概念化に関する四篇の散文詩」、すなわち『イジチュール』を含む『作品』の構想を告げているのである。

私は恐しい一年を過ごした。私の「思考」が自らを思考し、「純粹な概念化」に到達した。その反動で、この長い苦しみの間に私の存在が蒙ったものは全て筆舌に尽くし難いものばかりだったが、幸いなことに私は完全に死ん

だ。「……」この何ヶ月かの間、まず、あの昔ながらの邪まな羽毛、神との恐ろしい戦いがあった。幸いにも打ち倒した。しかし、この戦いはそいつの骨ばった翼の上で行われたのだ。そして、そいつの翼は、よもや示すとも思わなかった程猛烈な苦しみを示して、私を闇の中に運び去ってしまった。私は落ちていった、勝利を確信しながら、狂ったように、果てしなく——。「……」君に知ってほしいのは、今では私は非人称の者だということ、だからもう君の知っていたステファヌではなく——「精神的な宇宙」が、かつて私だったものを通して、自らを見、発展させるためにもつ一能力なのだということだ。「……」こうして私は統合の時に至り、この発展のイメージとなる作品を画定したところだ。すなわち、『エロディアド』を序曲とする三篇の韻文詩、「……」そして、「虚無」の精神的概念化に関する四篇の散文詩だ。<sup>(10)</sup>

『イジチュール』のこの唐突な出現を理解するには、前年の虚無との出会いの時点で直観的に把握された、言語による観念の創造について、もう一度考えてみなければならぬ。人間は、言語によって観念を創造する。したがって、観念は、いかなる意味でもア・プリオリに与えられているものではない。それは、物質に基礎をもたないのと同じく、精神にも基礎をもっていない。換言すれば、言語は、物質を反映しないのと同じく、精神をも反映してはいないのである。やがて、マラルメははっきり断言するだろう、言語は言語自身を反映している——「自らを反映する言語」、と。したがって、言語があって初めて、精神という物質とは異なる一つの宇宙が存在しうるのである。

後にソシュールが「ラング」(丸山圭三郎の明快な解説によれば「記号学的構成原理としてのラング」<sup>(12)</sup>)という概念を用いて定式化したこのテーゼを、しかしマラルメはあくまでも言語の詩的实践を通して消化しようとしたように思われる。と言うのも、既に述べてきたように、マラルメのこの体験の出発点にあったのは、虚無との出会いの中で直

観的に把握された、観念を創造するという言語の「神秘」だったのだから。

また、この書簡ははっきりと言明しているからだ、六七年初頭の言わば暗闇の数ヶ月の間にマラルメが体験したのは、思考と言語の主体である「私」の死の果てに到達された非人称の者——「精神的な宇宙」——への交身である、と。この体験を、「私」の沈黙と忘却との裡で語る言語へと、つまり、「私」を一切反映することなく、ただ「自らを反映する言語」からのみ出発して、この言語によって二次的に創造される「精神的な宇宙」へと、達する道程として読み解くことができるように思われる。

そしてまた、六六年の時点で既に『作品』が虚無に解体したマラルメ自身の精神的存在の言語的再構成であったように、<sup>(13)</sup>ここでもまた『作品』をイマージュとする「精神的宇宙」は主体である「私」が死の後に変身したものであるのだから。

更にはまた、この時期に書かれたと考えられる『イジチュール』中の「イジチュールの生涯」の諸断章では、執拗に鏡の反映が問題にされているのだから。そこでは、断章を追う毎に、鏡の中からイジチュールの反映が消失し、そして最後の断章では終に鏡を見つめるイジチュールの眼前で彼の鏡像は完全に消え失せてしまうのだが、鏡像として現われるイジチュールの「私」のこの段階的な消失は、同時に、イジチュールの語る主体としての「私」の定立の崩壊とも重なりあっているのである。<sup>(14)</sup>したがって、ここに、言語から「私」の反映を一つ一つ拭い去りつつ、終には「自らを反映する言語」へと到達しようとする思考のプロセスの反映を読み取ることができるだろう。

そして何よりも、同時期の別の書簡はこうも述べているのだから。——「こうしたこと全ては、私の能力の通常の発展によってではなく、私の破壊という罪に満ちた性急な、悪魔的で容易な途によって見出されたのです。それは力ではなく感性を生み出し、それが私をそこまで導いたのです。」<sup>(15)</sup>また、「私は大きな感性の力で、『詩』と『宇宙』と



の内的な共関係を理解しました。そして、『詩』<sup>ポエジー</sup>が純粹なものとなるように、それを『夢』と『偶然』から外に出して、『宇宙』の概念と並置させるといふ図式を抱きました。「……」私が感性のみの力によって『宇宙の理念』に到達しようとしたと、(ですから、たとえば純粹な『虚無』の打ち消し難い観念を守るためには、脳に絶対の空虚の感覚を押しつけなければならなかつたと)御知りになれば、あなたはぞっとなさることでしょう。<sup>(16)</sup>ここに共通して読まれる「感覚によって」という語句を、「詩句の実践によって」と読みかえる必要があるだろう。なぜなら、常に構造としての言語の中にのみ生まれてくるものである人間が我物としうるのは、言語の現動化としてのパロールの活動だからである。この活動を通して、人間は、超越的・拘束的・法的な言語を、組み替えるという形で乗りこえてゆく。いかにも簡單明瞭な例をあげるなら、マラルメがたとえ「自らを反映する言語」から出発しようとしても、その言語は、マラルメの場合ならフランス語という国語の中にしか求め得ないのである。したがって、マラルメが「自らを反映する言語」を出発点として非人称的な「精神的な宇宙」へと到達したといふこの体験⇨道程は、パロールの場——詩的実践の場——以外の所にその成立の場を求めることはできないのである。換言すれば、この死と変身とは、ステファヌ・マラルメ個人のレベルではなく、詩人として——実践する者として——のレベルで、体験されたのである。(したがってそれはまた言語学的理性的レベルでもない。それが、彼が「感性によって」と言わねばならなかつた理由である。)

書簡は、この死と変身が、「長い苦しみ」、「恐しい戦い」、「猛烈な苦しみ」であつたと語っている。それは、「自らを反映する言語」といふ視点に立つこと、換言すれば「私」の沈黙と忘却の中で思考し、語る事が、言語に対する主知主義的思考、つまり予じめ言語以前のかつ言語外的に措定された純粹観念や超越的主体の外的記号としての言語という考え方の、超克を含蓄しているからなのだ。それがまず「神との恐しい戦い」として行われた理由は、そこに

ある。ここで「神」とは、思考の超越的主体としての「私」の別名でもある。だからこそ、「私」の死は「猛烈な苦しみを示して、私（マラルメがなった『精神的宇宙』から見れば、もはや第三者でしかない私）を、闇の中に運び去ってしまった」のである。

もう一度くり返そう、この戦いもまた詩的实践として行われたのだということ。それを確信させてくれるのは、書簡のエクリチュールである。「あの昔ながらの邪まな羽毛、神との恐しい戦い〔…〕この戦いはそいつの骨ばった翼の上で行われたのだ。そして、そいつの翼は〔…〕私を闇の中に運び去ってしまった。」（傍点筆者）plumage（羽毛）— aile（翼）の語連合は、直ちに plume（羽）— pen（羽ペン）を呼び出す。つまり、神の翼の上で行われた戦いとは、私のペンの上で行われた戦いなのだ。

この戦いが成功したなら、つまり詩的实践が「自らを反映する言語」によって「精神的な宇宙」を創造しえたなら、それは、もはやステファヌ・マラルメという生物学的・歴史的諸条件が規定する一個人の精神ではなく、むしろそのような実践がうみ出した作品の匿名な主体の精神となるだろう。それをなおマラルメの精神と呼ぶとしても、その時マラルメという名称はこの匿名の主体に仮に貼付されたラベル記号にすぎない。かつてマラルメと呼ばれていた者は、作品によって構成される「詩的存在」になるのである。六七年のこの段階で、マラルメがそれに成功した、と言うつもりは全くない。だが少くとも彼はその可能性を視野においてはいいた。換言すれば、この時の彼は、実践を通じて彼の「精神的な宇宙」を言語的に存在させようと思っただけではいたのだ。彼にこの確信を与えたのは、前述したように『イジチュール』中の「イジチュールの生涯」の諸断章における言語実践だったであろう。だからこそ、書簡は、「私」の死と変身が終に成ったことを告げているのだし、また、この時点では、『イジチュール』は是非共実践されねばならなかったのである。

それにしても、六七年の書簡は一年前のそれとは何と異っていることだらうか。言語に対する新たな視点が彼を導いた「未知」の地方を、今や『イジチュール』の実践という形で歩み始めたマラルメが味わった予想を上回る困難さが、そこから一年前の書簡に見られた驚嘆を混えた恍惚をすっかり拭い去っている。それに代って感じられるのは、別種の恍惚、「統合の時に至」ったという確信がもたらす幻視者めいた恍惚である。

実は昨日作品の最初の素描を終えました。「…」そして目を閉じると、それがどんなだかが見えました。『ミロのヴィーナス』と「…」そしてダ・ヴィンチの『ジョコンダ』、この二つは私にはこの世界で二つの偉大な美ウツクシの火花のように思えます——そしてこの「作品」は、夢見た通りのものなら、三番目の火花です。完全に無意識な、唯一で不易な美、これがフィディアスの『ヴィーナス』です。キリスト教時代に入ると、美は、シメールに心臓を嚙まれ、苦しみつつも、神秘に、とは言え強いられた神秘に満ちた微笑を湛えて蘇り、この神秘が自らの存在の条件であることを感じとります。最後に、人間の科学によって、宇宙全体の中に自らとの共闘的諸相を再び見出し、自らの至高の語を得て、美は、自らに微笑を強いていた——それも、ダ・ヴィンチの時代には神秘的微笑を強いていた——秘められた恐怖を思い出して、今や、神秘に、とは言え幸福に、そして『ジョコンダ』がその宿命的な感覚をしか知らなかったあの神秘の理念を知り、再び見出された『ミロのヴィーナス』の永遠の静謐を湛えて、微笑しているのです。<sup>(17)</sup>

この幻視者の恍惚の源の一端は、明らかにヘーゲル哲学に求められる。ヘーゲル哲学の影響は、既に引用したカザリス宛書簡の表現の端々にも読み取れたのだが、とりわけこの書簡において著しい。<sup>(18)</sup>『精神現象学』が歴史を絶対精

神の自己実現のプロセスとして描き出したように、マラルメもここで、歴史を美の創造の弁証法のプロセスとして捉えようとしている。『ミロのヴィーナス』、『ジョコンダ』、『作品』という美の三つの創造は、美の「存在の条件である神秘」に対する人間精神の「無意識」、「感性」、「意識」という各段階を、また「彫刻(現前的)」、「絵画(感覺的)」、「詩(理念的)」という美の創造形態の各段階を、最後に、「芸術」、「宗教」、「科学」という人間精神の世界認識の各段階を、各々代表して、それ自体弁証法的関係におかれているのである。これが、絶対は、芸術の裡に既に現前し、宗教の裡では感覺的に語られ、絶対についての哲学において初めて決定的に自己を意識化するに至るといふ、ヘーゲルの絶対の弁証法的自己実現の三段階を忠実に踏まえていることは、言うまでもないであろう。ただ、これ程忠実にヘーゲルを下敷にしながらマラルメがヘーゲルと異るのは、ヘーゲルにとってはこの絶対が哲学によって実現されるのに対して、マラルメにとっては、絶対は美と同義であり、詩においてこそ創造されるものだった、ということである。『作品』において、美は、「人間の科学によって宇宙全体の中に自らとの共関的諸相を見出し、その『神秘』を最終に意識化して、「自らの至高の語(＝表現)」を得る」。この時、『作品』は美の最も純粹な表現がとりうる唯一の形態となるのである。したがって、マラルメは憚ることなくこう断言する。「美しかない——そして美にはただ一つの完璧な表現しかない。『詩』だ。それ以外は全て、偽りだ。」<sup>(19)</sup>言語が身にまとうている道具的有効性の幻想に欺かれて、存在すると人間が信じこんでいる一切の観念は、今や、単に「美」と同じ資格で言語の産物なのではない。それらはこの「美」の不純な現われ、この「美」の存在を垣間見させるだけのものにすぎないのだ。詩だけが、『作品』だけが、この「美」の、したがって観念として把握されたあらゆる存在の、唯一完璧な表現を可能にするものなのである。ここから、「世界は一冊の書物に到達するために作られている」と<sup>(20)</sup>いう、後年の『書物』についての断言まで、殆ど距離はない。

物質の虚無を否定し、『作品』の完成に自己の存在の言語的再構成を賭けたマラルメにとって、ヘーゲルの哲学がどれ程の魅力であったかは容易に想像できる。それは、この賭の正当性を雄弁に保証して、「統合の時」に至った彼が高みにすえられた視座から『作品』の究極の姿を見ることを許したのである。<sup>(21)</sup>こうして幻視者のな恍惚の裡で、彼は、足下にさながら一個の大伽藍のように拡がる完全に構築され終ったその姿を捉える。「日曜日、私は『作品』の夢を終えた。そして、それを支配する至高の詩篇の中に化肉して、尖塔の上の満足した天使のように、足下の建物を眺めた。それが美しいことが見てとれた。」<sup>(22)</sup>したがって、この時既に彼の思考の中では、『作品』は完成していたのだ、と言ってもよい。

### 一八六八—七一年（『作品』の第三の構想）

だが、「何事も書かれずしては存在しない」<sup>(23)</sup>ことを、マラルメは知るだろう。このように思考の実践の裡で『作品』が完成してしまったということ、これが逆に、『作品』を通常の意味で書くことを不可能にしたように思われる。換言すれば、虚無の奈落への墜落が、そのまま宇宙的視座への上昇でもあるという、六六—六七年にマラルメの精神が蒙った激しい振幅は、そのまま、マラルメが思考の実践において到達した「至高の語」、「自らを反映する言語」と、道具的有用性の幻想に浸された日常言語との間を距てる深淵となって拡がったのである。

私は二年間「夢」をその理念的な裸体で見るといふ罪を犯してきました。しかし、夢と私との間に音楽と忘却の神秘を積み重ねるべきだったのです。今や、純粋な作品の恐しいヴィジョンに到達して、私は殆ど理性も最も日常的な言葉の意味も失ってしまいました。<sup>(24)</sup>

言語が、その外に既に分節されている諸観念を反映するのではなく、「自らを反映」し、そうすることによって観念を創造してゆくものであるなら、言語の実践は、日常言語があたかも反映しているように見える諸観念を払いのけ、言語それ自体に耳を傾けるところから、まず始まらねばならない。言語の道具的有用性に慣れた耳には、その時言語は何一つ語らないように思われるかもしれない。だが、この沈黙に耳を傾け続ける時、そこには、「自らを反映する言語」から湧きあがる「音楽と忘却の神秘」が、つまり、言語が幻想的に反映していた諸観念の「忘却」の裡で、語と語の間の連合的・連辞的關係から創造される音と意味との「音楽」が、感知されるはずである。こうして、マラルメは、『作品』の究極の姿を幻視する（『夢』をその理念的な裸体で見る）ことをやめて、『作品』を存在させるために再び、美を創造するものとしての言語に視線を戻すのである。「音楽と忘却の神秘」を産出するような詩的言語の実践が、再び活発化した、と考えていい。

その一つの成果が、六八年夏に書かれた後の「YXのソネ」の第一稿<sup>(25)</sup>である。このソネに初めて言及している同年五月三日付書簡で、マラルメはルフエビュールとカザリスに *ソネ* という語の正確な意味を調べてほしいと依頼し、「そんな語はどんな国語にもないと誰もが断言しますが、その方が私にとっては大いに好ましいのです。それなら、脚韻の魔術によってその語を創り出すという喜び<sup>(26)</sup>が得られますから」と語っている。ソネは、*Sonnet allégorique sur lui-même* という題を付されて、次のような説明と共に、七月一八日にカザリスの許へ送られる。

このソネは、今年の夏一度夢想したことがあったが、その後「音声言語<sup>(27)</sup>」について企てた研究から引き出したものだ。つまり、このソネは向きが逆なのだ。意味は、もしあるとしても（だが、そこにこめられている詩の容量のために、その反対の結果になっても心慰むと思う）、語それ自体の間の内的な蜃奇楼によって喚起される<sup>(28)</sup>。

この二つの書簡から、この時期マラルメがとりわけ言語の音韻的側面に関心を集中させていたことが判明する。詩篇を構築するにあたって言語の道具的有用性の幻想を払いのけようとする試みは、六四—六六年の『エロディアー・ド』以来マラルメが様々なやり方で追求してきたものだが、ここでは、「脚韻の魔術」によって「いかなる国語にもない」語を創出するという形で、また他方では詩篇の意味を「語の内的な蜃奇楼によってのみ喚起される」ものにするという形で、追求されている。そればかりか、マラルメは意味などなくてもかまわないとさえ断言している。だが、これは詩篇が全く非意味であってもよいということではない。実際、無意味な詩篇というものはありえても、非意味な詩篇はありえないだろう。ここでマラルメが排斥している「意味」とは、言語の道具的有用性の幻想の側から見た非矛盾と了解可能性なのである。そのようなものは、なくてもかまわない。なぜなら、詩は、語の間の音韻的な連関が喚起する「内的な蜃奇楼」（「音楽と忘却の神秘」）にのみ成立するからであり、それこそ詩篇の意味と呼びうる唯一のものだからである。紙幅の都合上、ここでこの詩篇を詳しく分析する余裕がないのは残念だが、それが「自らを反映する言語」の一つの美事な実例であることを付言しておきたい。

わざわざこの詩篇に言及したのは、右に引用した書簡中に読まれる『音声言語』について企てた研究<sup>1</sup>に、興味をひかれるからである。この語句をもって直ちに、マラルメの言語学研究が既に一八六八年夏から開始されていた、と結論することはできない。と言うのも、後に述べるような事情から見ても、また『ノート』の内容とマラルメ及び友人たちの書簡との符号という点から見ても、『ノート』が書かれたのは一八七十年の前半と画定しうるからである。だが、一方で、書簡の文脈と書簡がおかれている状況とは、この「音声言語の研究」が、今述べたような「内的な蜃奇楼」としての意味を産出しうるような、言語の音韻的連関を探索するものであったことを、示唆している。他方、後に見るように『ノート』は音声言語を「音の類似によって事物の類似を創造する」ものと規定し、また『英語の単

語」は語彙を音の類似<sup>アナロジー</sup>によって分類する試みを行っている。したがって、六八年夏に企てられたという「音声言語の研究」が、言語学研究と全く無関係だったとは考えられない。おそらくこの頃のマラルメは、言語が「自らを反映する言語」となりうるためには、道具的有用性の幻想と余りにも深く結びついているように見える言語の意味的側面よりは、音韻的側面を利用する方が戦略的に有効である、との判断をもっていたのであろう。Sonnet *allégorique sur lui-même* という一つの詩篇を抜き出すことを許したこの判断は、言語学の論文を書くという計画にあっても、引き続き支配的だったと考えられる。

さて、六七年にマラルメの存在が蒙った「筆舌に尽くし難い長い苦しみ」は、その後も終ったわけではなかった。六八年から六九年にかけての書簡は、マラルメの心身が激しい発作に襲われたことを、そして六九年初頭の書簡は、終にペンを持つことさえ禁じられる程になっていることを伝えている。「私はまだ完全には危機<sup>クリシス</sup>発作<sup>エプサイコシス</sup>を去ったわけではない。私の良き秘書〔夫人のこと〕に書き取ってもらい、たとえ他の人の手によってであれ、ペンが私の意志によって進むのを感じると、動悸が激しくなる。」<sup>(29)</sup>それに伴って、彼がその究極の姿を見たときさえ信じた『作品』の構想は、再び動揺を蒙る。「一年間の忍耐の建造物全体が、〔…〕瓦解してしまった。」<sup>(30)</sup>言語学研究の計画が初めて口にされるのは、この時である。

私の生涯の第一の相は終わった。影に乗りこえられていた意識は、覚醒し、ゆっくりと新たな人間を形成している。この人間を創造した後に、意識は私の「夢」を再び見出すはずだ。それは何年かの間続くだろうが、その間、私は人類の生を幼年時代から意識的に生き直さねばならない。この活動を喰るために、この研究の年月に私の「エジプト学」となる実際的な目的を一つ与えようと思う。だが、それについて君に語れるのは、怪物の爪から完全に逃れ



たという確信をもてた時のことだ。<sup>(11)</sup>

まだ心身の危機（この「怪物の爪」から完全に逃れたという自信のなかったマラルメが、敢えて言明せずにいる「実際的な目的」が、実は言語学の論文によって学位を取得するというものであったことは、たとえば後に引用する翌七十年のルフェビュール宛書簡などから、判明している。だが、学位取得は、こう言ってもよいものなら、その効用のために設定された目的なのである。その効用とは、この時期のマラルメにとって焦眉の問題であった心身の治癒である。学位論文は、心身の危機を招く原因となった『作品』から、一時の間強制的にマラルメの関心を引き離すことによって、消耗し尽した心身の健康を回復してくれるだろう、という期待がなされていたのである。だが、だからと言って、言語学研究が単にそのみを目的とした、『作品』とは全く無縁な気晴らしだった、と言うのではない。マラルメは、言語学研究に費やされる年月は、また、「人類の生を幼年時代から意識的に生き直す」期間でもある、と語っている。この表現は、余りにも謎めいているので、様々な解釈を許すものであるが、論を先取りして言うなら、ここで述べられている「人類の生」とは、言語の歴史的な発生及び発展過程を指すものであると考えられる。言語学研究が問題になっていることだけが、その理由ではない。ヘーゲルを嚆矢とする、人類史に個人の精神的発達過程を投影する考え方は、十九世紀の思潮の特色であり、たとえばシュライヒャーなどに見られるように、言語学もその例外ではなかった。古代の諸言語や非ヨーロッパ世界の諸言語に対する関心は、何も十九世紀に初めて生まれたものではなかったが、ヨーロッパが植民地主義によって他大陸へ版土を拡げつつあった十九世紀は、この関心を育成し開花させるに絶好の土壌を形成していた。世界各地から、言語についての様々な情報や貴重な資料が、ヨーロッパに運びこまれた。それらに基いて、一八一六年のポップによるサンスクリット語と他の印欧諸語との比較研究（これを皮切

りに、印欧語族の研究は飛躍的に進歩し、十九世紀言語学を代表する歴史・比較文法が確立する）、また、一八二二年のシャンポリオンによるロゼッタ・ストーン解読（これにより、古代エジプト学が創始される）などの、華々しい成果が次々に生まれることになった。これらの研究は、十九世紀精神世界に、人類とその言語及び文化の起源の探求という関心と情熱を鼓吹する。極論すれば、歴史主義の時代であった十九世紀を支配していたのは、起源探求の情熱だったのである。自らも気鋭のエジプト学者であり、六九年一月には『死者の書』を翻訳していたルフエビュールの次の書簡は、当時のこうした知的動向をよく代弁している。「言語学を選んだとは賢明でした。言語学は未来の学問です。なぜなら今日、歴史は過去へと伸びたので、人間の起源は予感されるようになり、その層をなした土台が見られるようになっていますが、その土台に諸言語は原始的な魂の残骸の上に残された人間精神の足跡を記しているからです。」<sup>(32)</sup>とところで、確認しておきたいのは、起源に寄せられたこの関心は、同時に未来を志向するものでもあったということである。ヘーゲルの歴史観が目指す実現された絶対という歴史の終極は、起源への回帰によって終末的な近代を賦活し、豊饒な古代的精神に分析的な近代的精神という眼を与えて、究極的な統合を実現しようとする諸科学の試みに、投影されていた。既に註(21)でも述べたように、十九世紀全体を貫くこの思想的文脈内に、マラルメもまた位置付けられているのである。「人類の生をその幼年期から意識的に生き直すことによって、その果てに『夢』すなわち『作品』を再び見出す」というマラルメの図式は、この思想的文脈内に置く時、明瞭に理解されるように思われる。つまり、学位取得という「実地的な目的」を除外して考えるなら、マラルメはここで、言語の発生的起源を探り、その歴史的進化を跡付けることによって、『作品』の詩的言語を究極の言語として確立しようと計画しているのである。

言語学研究が『作品』にとってもつこうした意味をマラルメがはっきりと自覚するのは六九年末から七十年初頭に

かけてのことだったと考えられる。六九年末に、「今まである計画を隠してきたが、その計画は犯されずに残るだろうと思う。一卷の書を前にして、思考全体を再び見出し、私は（言語学の）研究に足を踏み入れたのだ<sup>(33)</sup>」と語ったマラルメは、翌七十年三月の書簡では、計画の全貌をこう語っている。

私は、学士号取得試験の準備をし、博士論文の可能性にも直面しなければなりません。全体を一つの努力にのみするために、言語学を選びました。更には、この特別の努力が、言語の装置全体に必ずや影響を及ぼすことと期待しています。「……」昔のように、私は詩篇の主題を破壊させたのです——『研究』が『夢』の中に侵入したからです。それが全てを席卷し、よいものと期待していた諸結果に直進して、喰らい尽くしています。これからやるのは少々のドイツ語です、それでもって、復活祭の休暇には、インド||ゲルマン諸語の（未翻訳の）比較文法の研究を始めねばなりません。つまり、サンスクリット語・ギリシャ語・ラテン語です。それに二年間かけて、その後が学士号。それからセム系諸語のもっと外的な研究を始めます。それにはゼンド語から入ります。最後に、博士論文、これこそこれらの作業を必要ならしめるものでしょう、予見されたものとしての論文。と言うのも、かつて私は愚かにも、「理念」へと直進してしまい、理念の蜃奇楼の数々に徐々に誘惑されることを自らに禁じてしまったのですから。五年かかる、でしょう。

こうしたこと全てと並んで、ごくゆっくりと、私の心と孤独との作品が構築されています。その構造が垣間見えています。実を言うと、平行するもう一つの仕事は、それもまたこの作品の科学的基礎付けに他ならないのです<sup>(34)</sup>。

この時期のマラルメは、既に健康も回復の途に向い、また、一方ではたとえばマックス・ミュラーの *Lectures on*

the Science of Language のような通俗言語学書に目を通し<sup>(35)</sup>、また他方ではルフエビュールから様々な助言や情報を得つつ、その言語学研究を進めていた。それを通して『作品』の最終的構想が固まりつつあったことは、暫く後の書簡が、第二次『現代高踏詩集』に送られたマラルメの『エロディアード<sup>(36)</sup>』を激賞するカザリスに対して、やや冷淡な口調でこう答えていることから、伺い知ることができる。「私は今やそれから遠く距っている。今私の頭の中にあるのは、それにも劣らず稀少で、全く未知のものだ。それは結論なのだ。」<sup>(37)</sup>『作品』の最終的な構想の内容が具体的に伝えられるのは、翌七一年春の書簡である。『作品』は、『イジチュール』(「夢見られた一巻のコント」)、『エロディアード』(「垣間見られ、口ずさまれた一巻の詩」<sup>(38)</sup>)、そしてその正体が未だ説明されていない、「一巻の批評、それは昨日までは『宇宙』と呼ばれていたが、今や厳密に文学的観点から考察される」<sup>(38)</sup>からなっている。この書簡でマラルメは、「私は純然たる文学者に戻る」<sup>(39)</sup>とも言明している。この言葉を、同時に二つの意味に解することができる。まず、『作品』は、今やヘーゲルの宇宙と手を切って、「厳密に文学的な観点から」構想されている、という意味に。だからそれが、言語学研究による『作品』の「科学的基礎付け」だったのである。そしてまた、言語学研究がこの主要な使命を果たした以上、学位取得という「実際的な目的」はもう放棄された、という意味に。

マラルメが言語学研究を計画し試みたのは、六六年から七十年にかけての概ね右のような思想的経緯の許でのことである。今や、その具体的な分析に取り組むべき時であろう。

## 二、『言語の科学』

### 1 はじめに

マラルメが彼の言語学を「言語」の「科学」と規定していることは、どうでもよいことではない。リトレ辞典によれば、共に言語と訳すことのできる二つのフランス語「langue」と「langage」には、次のような意味の差異がある。「langageはどちらかと言えば音声言語による思考の表現手段の集まりであり、langageはどちらかと言えばこれらの手段の行使である。」換言すれば、langageは所与としての言語（ソシュールの言う諸国語体 [les langues]）であり、langageはその行使としての言語（ソシュールの言うパロール）である。また、同じくリトレ辞典は、言語学 [linguistique] を「諸言語を、その原理において、その関係において、また人間本能の非意図的な産物として考察する研究」と定義している。こうした事柄にもかかわらず、マラルメが言語学研究を言語学研究する言語学としてではなく、「言語」の「科学」として行おうとしたことには、それ相応の理由があった。（本論考では、それを考慮してマラルメの言う Science du Langage を文字通りに訳すことにし、言語学とは訳さないことにした。また langue と langage については、マラルメがそれらを用いる時とソシュールが用いる時とでは自ずから意味が異っているので、まずマラルメが用いている時は、前者を言語、後者を言語として、区別できるようにし、またソシュールが用いている場合には、それらは一般的な語というよりはソシュール言語学の用語と考えた方がよいので、各々ランガージュ、langage と記している。但し、ソシュールの用語であるlangageがこの語の一般的意味である言語とはば重なる場合には、区別せずに言語と普通に記している。同様に parole についても、ソシュール用語はパロール、そうでない場合は音声言語と記している）

まず、マラルメは「科学」という語を、「ある対象に関して、『観念』の状態に達し、人間についての諸観念総体に属する用語の一つを形成すべく企てられている研究によって、認識へと前進すること」と定義している。他方「言語」については、「われわれの精神の一般的表現手段」という定義を与えている。言語のこの定義は、なにか言語がその

外に前以て定立されている精神なるものの外的表現であるかのような印象を与えるかもしれない。だが、マラルメの曖昧な言い方に惑わされてはならないだろう。これは、言語が精神の外的記号であることを、些かも意味してはいないのである。

言語は彼（デカルト）にとって虚構の道具に思えた。彼は「言語」の方法に従うことになる（その方法を規定すること）——自らを反映する言語。

最後に、虚構は彼にとって人間精神の展開方式そのものように思える——虚構こそがいかなる方法をも戯れに付す。そして人間は意志に還元される。<sup>(42)</sup>

デカルト的主知主義のこの大胆な読みかえが、そのことを確認させてくれる。言語は、その外にそれ以前に設定された思考を反映するのではない。言語はそれ自身を反映するのみなのであり、この「自らを反映する言語」が生み出す虚構の戯れが、人間の精神活動と言われるものなのである。したがって、ここで確かに人間の精神は中心ではあるが、それは言語の虚構が人間の精神を表出する限りでのことでしかない。精神は、言語という表現手段を得ることによってしか、精神であることができなないのである。

科学が、所与としての言語<sup>ラング</sup>をではなく、このようなものとして定義された言語を対象とすることは、したがって科学にある特殊性を与えることになる。「言語の科学」は、他の諸科学とは根本的に異なる位置を占めることになるのである。その差異を決定するのは、「言語の科学以外の」諸科学は、それを分類する公分母を知の術語の中に見出してきた<sup>(43)</sup>という事実である。様々な対象に対する科学の企てを可能にしてきたのも、実は言語なのであり、言語のない

所には、いかなる科学もありえない。したがって、『言語の科学』は、諸科学を可能にするものとしての言語という科学の公分母自体を問うものとなるのである。

科学について。——「科学」は「言語」の中に自らの確認を見出してきたのであるから、今や、「言語」の確認と  
ならねばならない。<sup>(44)</sup>

したがって、『言語の科学』は、その定義上二重の様相をもたねばならない。一つは「言語とその諸手段」を確認するという様相、もう一つは、「人間精神の展開方式そのもの」たる言語を確認するという様相である。後者は、後にソシュールが記号学的構成原理としての「ラング」という視点からその誕生を予告した「記号学」に、前者はその一部門としての言語学に、各々相当すると考えてもよい。だが、実際には事はそのようには運ばない。人間精神の展開方式としての言語という視点には、確かに明白に現代的なものが認められるのだが、それは十九世紀的な物質主義によって直ちに疊らされてしまうからである。その結果、マラルメ自身『言語の科学』が行うべき言語の二重の確認を区別しなかったわけではないのだが、この区別も一見「科学的」な物質主義の蒙昧さの中に還元されてしまうことになる。『言語の科学』は、それ自体によって裏切られることになるのである。

## 2 『言語の科学』の方法

### 虚構

マラルメによれば、「ある対象の『観念』の契機とは、対象のそれ自体における純粹な現在すなわち対象の現在の

純粹性の、反省の契機である。」<sup>(45)</sup>したがって、『言語の科学』が言語の觀念に達するためには、まず言語をその純粹な現在において捉えなければならぬ。それは談話〔conversation〕に見出されるはずであった。

「談話」は、われわれが対象である「言語」を抽象化することを許し、また同時に、「言語」の風景であるから、「科学」に対して言語の契機を与えることを許すので、われわれは談話においてこそ、「言語」を研究しよう。

こうしてわれわれの二つの用語〔言語と科学〕は、「談話」というやり方によってこそ、精神の瞬間的同意を得て、互いに手を取りあうのである。<sup>(46)</sup>

だが注意する必要がある。今日の感覚からすれば非常に奇異なことであるが、これは、言語を話者／聞き手間のコミュニケーションとして捉える、という意味では些かもないのである。マラルメは談話を、全ての言語活動が（文字通りの会話も、また読書という過去との対話も）共通してもっている普遍的な相、つまり、肉声によってであれ、「われわれの精神の内なる声」によってであれ、「純粹な現在」として現前させられた言語として、捉えているのである。『ノート』の「方法」と題された断章で、マラルメは言語の意味を決定する諸要素を吟味し、そのうちのどれが本質的要素であるかを決定しようとしている。だが、そこでは話者／聞き手の関係は全くと言ってよい程無視されている。

まず語の意味が、次いで、口調が異なる。人が何事かを言う時の口調には、新しいものが見出される。

われわれは、談話の口調を至高の限界、だから科学に触れないためにはそこで立ち止まらなければならない限界



——われわれの思考の震える輪の停止とみなすだろう。<sup>(47)</sup>

語られた言語は、それが語られる物理的状況や話者の身体的・心理的狀態に規定されて、そのたびごとに異なる口調を与えられる。それが同じ一つの語に無限の意味のヴァリエーションを可能にしているのだが、それは「科学に触れないためにはそこで立ち止まらなければならぬ限界」なのである。したがって、「科学に触れる」ためにはそれは捨象されねばならない。残るのは、「語の意味が異なる」という事態である。

語にはいくつかの意味がある。さもなければ人々の間には常に理解が成立することだろう——われわれはそれを利用するだろう——そして語の主要な意味として、われわれは、過去の書物との親しい交わりが沈澱させた、われわれの精神の内なる声によって発音される時、語がいかなる効果をうむのかを、この効果は現代の書物がわれわれにうむ効果から距たっているのかを探るだろう。<sup>(48)</sup>

同じ語が、それを用いる主体によって各々異なる意味を担わされている。このことは、相互理解を阻むだろうが、一概に非難すべきものでもない。そもそも、意味が異なるにもかかわらず、それが同じ語であると認められるのはなぜなのか。語が、用いられるたびに、意味の複数性にもかかわらず常に保っている唯一のものを、顕在化させるからである。したがって、語の見かけ上の意味の複数性の背後から、語の主要な意味が「効果」として産出されるのは、この唯一なものに注意が向けられた時なのである。「われわれの精神の内なる声によって発音された時に」とマラルメは書いている。語の常に保たれている唯一のものとは、語の外面的な形たる音的側面なのであり、そこにこそ語の意味

を決定する最も本質的な要素が見出されるのである。

『ノート』には、もう一つの談話についての断章がある。そこでは「発音された時の効果の産出」が、言語の虚構として位置付けられている。

：「談話」。ある談話、つまりその時談話であるものにおいてでもなければ（それは終った）、またわれわれが認識しようとしている談話の「抽象作用」においてでもなく、ここでは、談話が自らの反映するこれら二つの相に対して表現されるような、談話の「虚構」において。<sup>(49)</sup>

ここでマラルメは、言語が反映している二つの相を区別している。一方にあるのは「その時談話であるもの」、つまり語られ聞きとられるべく現前している言語の音的側面、他方にあるのは言語の「抽象作用」、つまり産出される効果である。このいずれか一方だけが言語ではない。この両者を併せもつものが言語なのである。そして、両者の関係を定義する語が、「虚構」である。だが、この語は、言語の音的側面とそれが産出する効果との間の関係が、（ポール・ロワイヤルの『論理学』以来今日まで、だが異なる立場から、述べられ続けているように<sup>(50)</sup>）本質的には恣意的であることを意味しているのではない。それどころか、マラルメが言おうとしているのは、全く別な事柄であった。『ノート』の別の断章は、この虚構を次のように説明している。

「言葉」<sup>ヴェルブ</sup>は、「生成」の《本質と同一な否定》である「理念」と「時間」とを通して「言語」となる。

「言語」は、「存在」の中での、「言葉」<sup>ヴェルブ</sup>すなわち言語の理念の展開であり、「時間」が言語の様態となった。それ

は、「存在」における「理念」と「時間」という相を通しての、言いかえれば「生」と「精神」とに従う展開である。ここから、「言語」の二つの表明である「音声言語」と「文字言語」とが生ずる。<sup>(5)</sup>

ここでマラルメは、言語が反映している二つの相、「その時談話であるもの」(言語の音的側面)と「言語の抽象作用」(産出される効果)とを、各々「時間」と「理念」と言いかえている。そして、言語の背後に、常に理念・時間・言語というヘーゲル弁証法的な生成によって自らを実現する、言語の理念たる「言葉」の存在を想定して、この視点から、言語の虚構を、この理念の時間に規定された展開として説明している。換言すれば、人間の言語とは、「言葉」という理念と時間との弁証法的統合に他ならないのである。したがって、この統合は、更には人間における理念と時間、つまり精神と、物質的・有機体的な生との、弁証法的統合でもあることが、続いて確認されている。言語、すなわち音声言語と文字言語とは、各々のやり方でこの統合を実行している。

### 音声言語

『音声言語』は、音の類似によって事物の類似を創造する。

これが、音声言語による理念と時間の統合の方法である。『ノート』はこれ以上この規定を敷衍していないが、『英語の単語』がこれに基いて英語の中のアングロサクソン語系の語彙を共通する語幹に従う語族に分類しているので、暫くそれに拠って、マラルメの言う「音の類似による事物の類似の創造」を考えてみよう。ここではPの語族を例にとることにする。

- TO PACK, *emballer*.
- PALE, *palis*.
- PAT, *coup léger*.
- PATCH, *morceau*.
- PATH, *sentier*.
- PEEDLE OU FIDDLE, *s'amuser*  
à des riens.
- PELF, *richesse*.
- TO PICK, *piquer, choisir et*  
*cueillir*.
- PILLOW, *oreiller*.
- POOL, *mare*.
- PORE, *fixer les yeux sur*.
- TO POUND, *mettre en fourrière*.
- TO PRANK, *orner*.
- P
- PECK, *picotin*.
- PEG, *cheville*.
- Lat. pango, punctum.
- PILE, *tas*.
- BALL, *balle*,  
et BOWL, *bol*.
- POLE, *perche*.
- POLLARD, *arbre étêté*.
- TO POLL, *ététer*.
- PITAPAT (reduplic.), *palpitations*.
- TO PATTTER, *frapper comme la grêle*.
- TO BOTCH, *rapetasser*.
- TO BODGE, *manquer de*.
- TO PAD, *cheminer*.
- RAD(LOCK), *cadenas pour la porte d'un*  
*sentier*.
- PEDLAR, *colporteur*.
- TO PILFER, *dérober*.
- PITCH, *degré*.
- BEAK, *bec*.
- PEAK, *pic*.
- TO POKE, *fouurrager*,  
et —ER, *tisonnier*.
- POCKET, *poche*.
- TO PUCKER, *vider*.  
Lat. pungo.
- PILLION, *selle à coussin*.
- PUDDLE, *flaque*.
- PURBLIND (pour PORE—) *très myope*.
- POND, *étang, qui enferme l'eau*.
- TO PRANCE, *se cabrer, comme en se pavanant*.

この語族の表には、続いて次のような説明が付されている。

Pは、しばしば母音または二重母音を媒介としてと結びつく。時には別な文字が後に来ることもある。また々とも結びつく。Pは、これらの子音のいづれかとの結びつきから、Pには欠けている意味を引き出す。Pだけが孤立していたなら疑問に思われるかもしれない意味である。なぜなら（鋭く発音されると時々その意味をはっきりさせて、ある生き生きして明白な行為もしくは対象を表わす）この文字が含まれている、蓄積、得られた富、停滞〔entassement, richesse acquise, stagnation〕と、<sup>(54)</sup>極めて明白な志向を別にすれば、そこに唇音のみの歯音〔マ〕の中での相補物は稀にしか見られないだろうからだ。

『英語の単語』の中で最も注目され、しばしば、詩人の荒唐無稽な夢想として、卓越した創造力の所産として、またあるいはマラルメの時代を先取りした爛眼さとその全き現代性の証左として、毀誉褒貶をまきおこしているのが、このような語族の分類と音文字に対する説明なのである。<sup>(55)</sup>そこで、この語族を分析する前に、まずマラルメがどのような原則に従ってこの分類を行っているのかを確かめておこう。彼は二つの原則をあげている。

一、「これらの辞項の目に見える類縁関係は、語の現在の状態、すなわち英語の単語という状態を超えた所に位置付けられない必要がある。<sup>(56)</sup>」

二、「この言語に入ってきた時の形から長い間に少し変ってしまった幾つかの語が、以前は一つのものに他ならなかったなら、それらを真の過去に従って集めないというのは、純粹な術学趣味となろう。<sup>(57)</sup>」

第一の原則は二つの重要な点を含んでいる。まず第一に、語族の分類は、辞項間の「目に見える類縁関係」つまり

語の外面的な形に従ってなされているということ。換言すれば、分類は、語の指向対象間に存在する自然的關係に基いているのでも、また思考がこれらの対象間に確立する論理的關係に基いているのでもない。次いで第二に、第一の原則は第二の原則の制限として機能しているということ。したがって、語族の分類を合理化する第三の仮説とも言うべき語源的分類は、条件付きでのみ認容されることになる。つまり、この分類の根拠を英語以前の段階にまで遡って求めることは、禁じられているのである。(これは、「共通の太古の起源」たる印欧祖語に常に諸言語を参照させようとする比較文法とは、基本的に一線を画することになるという点で、極めて重要なのだが、それについては後に改めて触れることにしたい。)

右に述べたことを念頭においたうえで、この表を検討してみよう。まず確認されるのは、左側にあげられている語幹を示す語と右側にあげられている語族の語との間には、音と意味との平行した類似性が認められる、ということである。たとえば、TO PACK の語族では、この語と PECK 及び PEG の間に「p-k(s) / 「詰めこむ」が一つの絆となつて張り廻らされている。同様に、語幹を示す語相互間にも同じ類似性が認められる。これらの語は、形式面では語頭の子音 [p] に母音や子音が後続して形成され、内容面では、後続音の差異に応じて意味の変化が認められるが、語頭の [p] の共通性のために、それらの意味の間にはある類似性が浮かびあがってくるのである。TO PACK は「詰めこむ」こと、PATH は踏み固めてできあがった「小径」である。そこでこの両者は entassement「積み重ね、押しつけ、一つに固めること」という観念を共有する。この観念は、PELF と TO PRANK では蓄積されて「得られた富」に、また POOL, TO PORE, TO POUND TO PEEBLE では各々水の停滞、眼差しの停滞、閉鎖による停滞、慢然たることとの停滞という観念に、転位する。したがって、これらの互いに関連しあっている観念「蓄積、得られた富、停滞」は、共有されている語頭の音=文字 P が担う観念(「明白な志向」)であると結論されるのである。さて、P は「鋭く

発音されるとその意味をはっきりさせて、ある生き生きとして明白な行為もしくは対象を表わす。」それが *to pick* や *pay* の語族に見られる、圧迫としての *entassement* が「突く」や「軽い打撃」に転位した例である。最後に P は、母音や二重母音を介して *i* に結びつくと、「P には欠けている意味を引き出す。」それが *PALE* の語族の「円形」や *pillow* の語族の「柔らかな弾力ある膨らみ」という観念で、そこでは無声唇音を表わす P は *i* との結合によって、「P だけが孤立していたら疑問に思われるかもしれないような意味」、すなわち有声唇音を表わす B がもつ「膨らみ、屈曲」<sup>(60)</sup> の観念を得ているのである。P の語族でありながら B で始まる語が含まれているのはこの理由による。

マラルメは五つの母音字と十七の子音字についてこうした語族分類を行い、語頭の音 II 文字とそれが担う観念とが遠心力の中心となって、語族の語を音と意味との両面において互いに結びつけている様を、読者に経験的に確認させようとしている。ここで次の諸点に留意する必要があるだろう。まず第一に、マラルメは、ある音がア・プリアオリにある観念を表わすなどとは一言も言っていないことである。語頭の音 II 文字が担う観念は、語族の語との関係から、帰納的に、結論されているのである。第二に、この観念は、語族の語の指向対象の間の自然な関係から引き出されるものでもなければ、また語族の語の意味の間の論理的関係から引き出されるものでもない。語族の語を互いに関係付ける根拠は、語の音的側面における類似だけなのである。語の音の類似が語を語族に集めるからこそ、語の意味に共通するある観念が抽出されるのである。また、こうして観念が抽出されて初めて、語の指向対象たる事物の間に、それまでは存在しなかったある類似性<sup>(61)</sup> が、「世界の諸現象の裡に閃く象徴」<sup>(62)</sup> が、二次的に、産出されるのである。「発音された時に語が産出する効果」、「音の類似による事物の類似の創造」というマラルメの言葉は、このように理解される必要があるだろう。そして、産出されるこの効果、創造される事物のこの類似は、あくまでも二次的なものであるがゆえに、言語の音的側面と観念との関係は、虚構と呼ばれるのである。

### 文字言語エクリチュール

次に、言語のもう一つの表明である文字言語エクリチュールに移ろう。『ノート』は文字言語による理念と時間との統合を、こう説明している。

「文字言語エクリチュール」は音声言語パロールによって自らを表明する「理念」の仕草を記し付ける。したがって、文字言語エクリチュールはそれらの仕草に反映を与えて、現在には（読書によって）それを完成させ、また未来にはそれを音声言語パロールとその後裔との継起的な努力の記録として保存する。<sup>(62)</sup>

文字言語エクリチュールの第一の機能は、音を文字へと転写することによって、音声言語パロールが行う観念の創造（「言葉」ヴェーブル）という理念の仕草）を定着することである。この定着によって、読書の現在に再び音声言語パロールは蘇り、たえず新たに、その観念の創造を完成させることができる。だが、これだけでは、文字言語エクリチュールは音声言語パロールの記号にすぎない、とは言えないだろうか。確かに、マラルメの文字言語エクリチュールに対する態度にはそういう面が認められる。たとえば、『ノート』の次のような記述がそうだ。

語を經由して文イから文字エへ至ること。その際「記号」<sup>(63)</sup>すなわち文字言語エクリチュールを利用する。それが語をその意味に再び結びつけているのだから。



ここでは、文字言語エクリチュールは、それ自体では即座に消失してしまうものである音を捉えるための「記号」にすぎない。「英語の単語」にも同じ考え方が見出される。

読者であるあなたの眼の下にあるのは、これ、書かれたものである。それが教える所は、書かれたものに固有の特質、すなわち綴字と意味に限られている。「…」〔書物には〕何があるだろうか。まずは語である。語それ自体は、それを構成している文字に認められる。語が連なると、文だ。<sup>(64)</sup>

音と文字、発音と綴字のこの同一視は奇妙なものに思えるが、これは当時音と文字の区別が十分に意識されず、全ての文字言語エクリチュールは発音される個々の音の表記であると素朴にも考えられていたからである。このことは、一八七十年一月のルフエビュールからの書簡によっても確認される。「全ての文字言語エクリチュールは音声的だ。中国のキー・ワードでさえもそうで、それは象徴的であると同時に音声的だ。〔…〕全ての文字言語エクリチュールが発音されます。したがって、音声表記法に関する特別な概論というものはありえませぬ。<sup>(65)</sup>」この書簡から、マラルメが音声の表記法に関する参考書の紹介をルフエビュールに求めていたことが分る。これに対してルフエビュールは、文字言語エクリチュールは全て音声を表記するものであるから、「音声表記法エクリチュールに関する特別な概論などありえない」と答えている。言語の最小表意単位である音の記号となる文字、というマラルメの考え方には、当時のこのような一般通念が反映しているのである。

だが、マラルメは、文字言語エクリチュールによる音声言語ボカールの定着に、単にそれだけにはとどまらないもつと積極的な意義をも見出していたように思われる。「一国民の一時代の『文学』は、全ての社会的身分の話し方を文字言語エクリチュールによって定着しているので、政治や宗教の抽象的概論の中で、私的公的な風俗を活写する小説家や劇作家の素描の中で、あるいは

多くのニュアンスを含んだ詩の中で、十全に、つまり豊かに、その国語が含まれている諸々の欲求を満足させている。これらのジャンルのどれもが、言語の中で自らを切り取って、何らかの支配的理念を、つまり変化に富んだ綱目スクリーンを身にまとうのだ。それは、一方では透明で中立的な口調を求め、殆ど思考それ自体にも似たベールである。他方では、親し気で、釉薬をかけられたように輝き、色合様々で、生命のように多種多様な、ある閃きによっていっそう豊かである。<sup>(67)</sup>つまり、文字言語による音声言語の定着は、音声言語による理念と時間との統合を、言語という共時的視野において考察することを可能にするのである。ここに、この定着から結果するもう一つの機能、つまり文字言語による音声言語の保存という機能を加えると、更に歴史という通時的視野が開かれる。文字言語は、言語の形成の歴史を、言語による「言葉」の実現の諸段階として、提示しているものなのである。『英語の単語』の序論第二章「沿革」は、まさしくそのようなものとして文字言語を解説する試みである。そこで、英語の祖である低地ドイツ語最古の文献、モエソルゴート語で書かれたウルフィラスの『福音書』に始まって、次々に枚挙される詩人やその作品は、何よりもまず、英語の形成の歴史の各段階において言語が「言葉」をどのように実現しているかを示す記録として、価値を与えられているのである。

### 「言葉」

文字言語が開く言語及び歴史という視野は、『言語の科学』にとって極めて重要なものである。なぜなら、この視野においてこそ、単に「言語とその諸手段」、すなわち言語による「言葉」の実現の諸相が確認されるばかりでなく、汎時的視点から「言葉」をそのものとして捉えることもまた可能となるからである。そして、この「言葉」の解明においてこそ、「人間精神の展開方式そのもの」としての言語は確認されるであろう。

「言語」に適用されたこの「科学」という理念は、「言語」が自らとその諸手段とを意識化した今も、ア・プリオリに次のような所与を与えるという点で、依然然り豊かなものである。「科学」は、それらの所与の展開に専心しなければならぬ。

1 それ自身へと向きを変え、一方では、科学とは観念的欲求に答える精神の瞬間的行為であることを、また他方では、諸々の辞項は、「言葉」の諸々の表明を評価するのに役立ち、また「言葉」の目録から引き出されているのであるから、互いに等価であり、したがって科学においても同じく等価であることを見てとって、科学はそこから、全ての辞項は科学の対象である物質と精神との間に位置付けられる瞬間的行為であることを結論し、大胆にもこの問題を説明することができる。なぜなら、今や科学はその表現手段の有効性を心得ているからである。

2 それらの辞項全てが等価であるのは、人間、すなわち彼が属する人類においてである——精神と物質という事柄に対して人間とは何であるかを、生理学によって研究すること。そして、そのためには生理学を歴史に適用すること。歴史生理学。

3 精神。物質と人類というその二重の表現に対して精神とは何であるか。また、われわれの世界はいかにして「絶対」と再び結びつきうるか。<sup>(88)</sup>

『言語の科学』は、言語が、音の類似によって、それ以外の何ものにも基盤をもたない二次的な産物としての観念を創造することを、確認した。音声言語が実行するこの虚構（「言葉」の実現）は、文字言語による音声言語の定着と保存の結果、言語という垢がりの中で全体的に考察されることが可能になる。諸言語の裡に見出されるのは、各言語

による「言葉」の実現の全体的様相であり、そこにこそ言語によって二次的に形成された観念の世界の見取図が読み取れるのである。『最新流行』のコラム、「教育について」は、それを美しい刺繍や糸レースにたとえている。「一つの言語は、その形成を偶然に委ねるところか、刺繍や糸レースの美事な作品同様に構成されているのです。理念の糸一本たりと失なわれはいたしません。ある糸が姿を消すのは、少し先の方でまた現われて別な糸と一つになるため。全ては集まって、複雑なそれとも単純な、理念的な見取図となっております。」この見取図は、言語によって異っているだろう。だが、それを作りあげる手の持主は共通している。それこそマラルメの言う「言葉」、すなわち、物質には属さない二次的なものとしての観念の世界を形成してゆくという人間に生得的な言語能力なのである。この「言葉」つまり言語能力の音的实现によって、一次的には「物質の空しい形態」にすぎなかった人間は、物質には些かも依存しない固有の精神を獲得する。科学そのものも、対象の観念を一つの辞項として形成するものである以上、こうして得られた精神の活動の別名にすぎないと言えるだろう。「科学とは観念的欲求に答える精神の瞬間的行為である。」他方、この観念の世界を形成している個々の要素である辞項は、それ自体「言葉」の音的实现であるという点で「互いに等価であり、したがって科学においても同じく等価である。」つまり、いかなる辞項も、人間という存在の裡に現われている二重の次元、すなわち一次的な物質の次元と二次的に獲得された精神の次元との間にあって、肉声によってあれ「精神の内なる声」によってあれ発話される瞬間に、それ自身の裡で物理的な言語音と観念とを統合するという形で「言葉」を実現することによって、発話主体を物理的次元から精神的次元へと飛躍させるという等しい力をもっているのである。こうして『言語の科学』は、「全ての辞項は、科学の対象である物質と精神との間に位置付けられる瞬間的行為である」ことを結論するのである。

だが、「これらの辞項が全て等価であるのは、人間、すなわち彼が属する人類においてである。」なにゆえ、人類に

おいてのみ、発話という行為は「言葉」<sup>ヴェルク</sup>の実現となりうるのか。この飛躍が人類にのみ許されているのはどうしてなのか。換言すれば、「精神と物質」という事柄に対して、人間とは何であるか。「物質（＝言語音）」と人類というその二重の表現に対して精神とは何であるか。」

これらの問に対して、『言語の科学』はある仮説をもって答えようとしていたと考えられる。『英語の単語』の中で、語族の表を提出するに先立って、マラルメはこう語っている。「語族に」結びつけられている語については、意味と音との間の類似の最大限もしくは最小限が、成立する限りでの語の間の距たりや類似をひきおこしている。たどられる順序は『辞書』のそれとは別なものであり、そこに唇音、喉音、歯音、歯擦音、氣息音の分類が認められるだろう。この分類は、科学的装置から借りて行ったものではなく、おそらく全体的な意味作用と文字との間の関係によるものなのである。もしそのような関係が存在するならば、それは音声言語の諸器官のどれかが、ある語において特に用いられることによってに他ならない。<sup>(70)</sup>つまりマラルメは、調音に際して用いられる発声器官の部位が、言語音とそれが担う観念との間の絆を必然的なものにしていて、と考えているのである。このような仮説は、今日の言語学的一般常識からすれば、言語学者としてはしよせん素人にすぎなかった詩人の、極めて詩人らしい夢想として片付け得るべきであろう。<sup>(71)</sup>言語学は今日、人間の言語が音声言語の形をとったこと自体偶然の結果にすぎず、言語の本質とは無関係であり、言語にとつて本質的なのは言語音や観念の形相のみであること、能記/所記結合は恣意的であり、また個々の音素は表意機能は果たしても表意作用はもたないことなどを、はっきり確認しているのである。だが、このような認識から未だはるかに遠い所にいたマラルメは、この仮説の実証を歴史と生理学とに期待する。「精神と物質」という事柄に対して人間とは何であるかを生理学によって研究すること、そしてそのためには生理学を歴史に適用すること。歴史生理学。」

マラルメの言う生理学が音声生理学であることは、即座に推察がつくであろうが、また次の事実によっても確認される。まず一八六九年末の書簡で自分の計画している研究が言語学であることを明言したマラルメは、カザリスに「マラス・ヘンリー・ハクスレーの『基礎的生理学講義』を入手してほしいと依頼している。翌七十年四月三日付のカザリスの書簡がやはりこの書物に言及しているので、この書簡と相前後してカザリスからマラルメの許にこの書物が送られたものと推測される。そして確かにマラルメは、到着するや直ちにそれを通し、検討したにちがいない。なぜなら、この書物についてマラルメがカザリスに次のように語るのは、カザリスのこの書簡に対する返信（四月五日付）ではなく、やや後の書簡だからである。「小さな生理学の書物について君に何の返事も出さなかったのは、それを検討していたからだ。君の言う通りだが、科学の書物が私にとって下らないなどということはありえない。私はいとも簡単に、咽頭は脳内にあると思ってしまうくらいなんだから……」<sup>(72)</sup> 同じ書簡でマラルメは、「ハクスレーを読むのに必要」なので、基礎的な、だが入門書ではなく近代的視点から書かれた物理学と化学、また解剖学と博物学の、各々適当な書物を紹介してほしいともカザリスに依頼している。これらの事実は、マラルメがとりわけ発声器官の生理学に関心を抱いていたこと、そしてその関心が先に述べた問題の仮説と結びつくものであることを、物語っているのである。

彼の仮説にとって生理学が重要なものであることは多言を要さないだろう。言語音と観念とを結ぶ絆が調音基盤に基くものなら、それを確認させてくれるのは生理学なのである。他方歴史もまた重要である。既に述べたように、歴史の中にこそ言語の形成過程はその全貌を露わにしているからである。したがって生理学を歴史に適用することによってこそ、歴史の各段階において、言語は調音という生理的手段によって観念の創造（グエツツ「言葉」の実現）を実行していることが、諸言語の比較分析を通じて確認されるだろう。この作業における文字言語エクリチュールの戦術的有効性に再び留意して

おくことは、無駄ではない。文字言語が歴史という視野を開き、その各段階における音声言語を文字によって定着・保存しているからこそ、この作業は可能になるのである。

この作業、つまり文字言語の歴史生理学的解説によって、もしマラルメの問題の仮説が実証されたとしたら、そこから導き出される結論はどのようなものであろうか。確言できることは、「言葉」という人間の生得的言語能力、更には人間の精神の構成原理自体が、物質的なものとして解明されるということである。マラルメが意図していたのもそのことであった。「〔文字言語は〕音声言語と文字言語との類縁関係を与えて、いつの日かこの両者の類似性が確認されたあかつきには、『言葉』が、言語というその手段の背後に姿を現わし、物理学と生理学とに返され、一つの原理として、『時間』と『理念』とに適合して、別出されるようにする」と、マラルメは書いていたのである。マラルメが、一方で「言葉」を言語の「理念」であると確言しながら、他方でそれを物質的次元に位置付けた理由は、一つしかない。「言葉」に物質的な基盤を与えなければ、それはア・プリオリに定立されたものとなり、したがって最終的には神から与えられた「言」となってしまうからである。反対に、「言葉」が物質的に解明されるなら、その時こそ、言語は、物質に他ならない人間が、物質にすぎないという自らの宿命的条件を、調音という他ならぬそれ自体物質的・生理的手段によって、超克する行為となるのである。

### 一般文法と修辞学

調音基盤が言語の音と観念との結合を必然ならしめているという仮説を、歴史の諸段階に見られる諸言語の比較分析を通じて実証すること、これをマラルメは「一般『文法』となろうとする歴史・比較『文法』と呼んでいる。それと並んで『言語の科学』のもう一本の柱となるのが、「修辞学」であった。後者については、『ノート』に極めて謎

めいた短い記述があるのみなので、想像でしか語ることができない<sup>(76)</sup>。ただ、僅かながら手掛りを与えてくれるように思われるのが、『最新流行』のコラム「教育について」である。オーギュスト・ブラシエの言語学関係著作を推奨しているこのコラムは、こう締め括られている。「まずは花々。次いで花々は修辞学によって、花束となりました。つまり、言語の語と文学です。」<sup>(77)</sup>これは各々、前者はブラシエの *Grammaire Historique* 及び *Dictionnaire Etymologique de la Langue Française* に、後者は同じく *Morceaux choisis des grands écrivains du XVI<sup>e</sup> siècle, accompagnés d'une grammaire et d'un dictionnaire du XVI<sup>e</sup> siècle* 及び *Recueil de morceaux choisis des écrivains français du IX<sup>e</sup> siècle à la fin du XV<sup>e</sup>* に対応してゐる。ここから類推するに、語を扱う「文法」に対して「修辞学」は文、すなわち文学を扱うものであったのであろう。

なお付言すれば、語を扱う「文法」と文学を扱う「修辞学」という『言語の科学』の構成は、マラルメの主要な英語教科書の間の関係にも反映している。註(2)に列挙したように、一八七十年代から八十年代にかけて、マラルメは都合十冊ばかりの英語教科書を執筆もしくは計画しているが、問題となるのは、一八七二年頃から計画されていた『公立学校授業内容準拠英語完全講座・全三巻』(*Cours complet d'Anglais suivant les leçons de l'Université en trois volumes*)<sup>(78)</sup>である。『英作文集』の巻頭におかれている序文によると、『英語完全講座』は、『英作文集』、『英語詞華集』(*Pages célèbres de l'Anglais*)、<sup>(79)</sup>『英語の単語』からなっている。(このうち『英語詞華集』は、『英語の単語』のダイジキスト版である『英語とは何か』の広告原稿では『英文学詞華集』(*Pages célèbres de la Littérature anglaise, prose et poésie, un volume, recueil de morceaux avec notices en français*)<sup>(80)</sup>となつており、<sup>(81)</sup>実際に書かれた原稿では『英語の美』(*Anthologie à l'usage de la jeunesse, Beautés de l'Anglais, Prose et Vers en un volume*)と題されることに<sup>(82)</sup>なる。)内容であるが、『英作文集』は、「古くて常に新しい、貴重で魅力的な文章の宝庫、会話の流通貨幣でありな



がらも国民の精神を預かってもいるもの、つまり諺、俚言、日常的な言い回し<sup>(82)</sup>を集めたもので、それらのフランス語訳を集め、文法規則を付した『全ての文法書のための英作文集・生徒用』と、その解答、添削、書き取り及び暗記に用いるよう原文を集めた『暗記で覚える英語千文』との二巻からなっている。『英作文集』と対になるのが、英文仏訳問題集『英語の美』(「いつの日か英語の作家たちを、最も昔の巨匠から未だ存命中の作家たちまで読んだ時見出すだろう美しさの全ての大凡の観念を与えるに、その簡潔さという点で好箇の見本<sup>(83)</sup>」である。この両者は相俟って、「日々の文章の中では慎ましく日常的な、大作家の詞華集の中では堂々と稀少な、英語の花そのもの<sup>(84)</sup>」を学習者に見えるのである。これら二つの著作と更に対をなすのが、『英語の単語』である。したがって、『英作文集』とりわけその『暗記で覚える英語千文』と『英語の美』とが「修辞学」に、また『英語の単語』及び『英作文集』中の「文法規則を集めた」『全ての文法書のための英作文集・生徒用』が「文法」に、各々対応するとみなすことができる。「(概論とも文献学そのものともみなすことのできる)これら三冊の本以上のものは一冊たりとない。これらは、書名こそ異っているが、内的には補充しあっている。その一冊を注意深く読み、多くの諺の作者である英国民の善良さと魅力とに満ちた本能と、大作家の文学的精神との協働が提示している残る二冊を訳するならば、その人は、単に英語の文芸を根底から知るだけでなく、また、英語の魂と精神をも認識するだろう。」

### 3 『言語の科学』と歴史・比較文法

前節で見たように、『言語の科学』の方法論は今日の言語学のそれとは大きく異っている。この差異は、ある範囲までは今日の言語学と十九世紀の歴史・比較文法との間に認められる差異に属する。この点ではとりわけミュラーの『言語学講義』の果たした役割が大きかったと推察される。だが、『言語の科学』には歴史・比較文法の枠を逸脱して

いる面も認められる。この逸脱は意識的なものであり、最終的にはマラルメはミュラーに代表される歴史・比較文法に批判と不信を投げつけることになる。では、『言語の科学』は、どこまで当時の言語学と歩みを共にし、どこで袂を分かつことになるのだろうか。

### 音論の影響

まず歴史・比較文法において主要な位置を占めていた音論をとりあげてみよう。周知のように十九世紀の言語学は、一つの言語族に属する諸言語は共通の祖語から発して分裂したという大前提に基いて、その研究を進めてきた。この前提に従えば、同一言語族に属するどの言語のどの音も、本来の祖語の音を継承しているはずであり、それが法則的に変化した結果であると考えねばならない。ポップ、ラスク、グリム、シュライヒャー等の比較研究は、多くの実例に基いて印欧語族の諸言語間には規則的な音韻対応が成立することを実証して、この前提の正しいことを論証した。言語の歴史は、その重要な側面において音変化の歴史であることが確認されたのである。こうして音変化の実体を説明する音論は、言語学の主要な部門となった。だが、歴史・比較文法における音論の特色は、生理学との深い関りにある。音変化の研究には発声器官の認識が不可欠であることを積極的に主張したシュライヒャーは、「発声器官の生理学にのみ、音の歴史の事実の説明を期待することができる」と、また彼の思想を多くの点で受けついでミュラーは、「音韻的衰頹は、筋肉エネルギーの弛緩にのみ帰せられる以上、単に生理学的説明のみを許容する」と語っている。これが物質主義的な言語観であることは言うまでもないが、当時としては必ずしも誤まった理解であるとは言えない。音声生理学の知識が不完全だったこの時代には、音変化の実体を明確化してその規則性を確立するためにはまず、「個々の単音の調音とそれらの関係に関する正しい認識」をうる必要があることだったのである。

とりわけ歴史・比較文法による音論のこうした捉え方がマラルメの仮説に多くの点で影響を与えていることは、容易に気付かれるだろう。音と観念との結合という考え方は、印欧祖語の存在が科学的に論証された結果、現用の印欧諸言語の裡にこの祖語が所有していた語根の存在が確認されたという事実がなければ、生じなかったであろう。また、歴史と生理学が重要な役割を演じていることも見逃しえない。最後に、物質主義的な言語観の共通性を指摘することができる。それはとりわけ、マラルメが言語の音的側面を考えるにあたって、終始調音という生理現象に過大な重要性を与えていた点に、明白に認められる。確かに、マラルメも「われわれの精神の内なる声」による発話を考慮に入れている以上、調音される個々の物質的音声（ソプラノかバスかなど）を問題にしているわけではない。彼は、「全体的な意味作用と文字との間の関係」と語っている。要するに、文字によって転記される（と素朴にも考えられていた）具体的な物理音——発音されうる全ての物質的音声から抽象された、イエルクスレウの言う表現の実質ヌメラスツクとしての言語音——が問題となっており、これは、文法学者が生理学によって認識しようとしていた調音される個々の単音と同じものである。

### 歴史・比較文法からのずれ

今見たように、『言語の科学』は歴史・比較文法の殆ど圧倒的と言ってもよい程の影響下にある。だが、そこからの微妙なずれを示している点も幾つか認められる。ここでは、それらの点をまず確認しておこう。

『英語の単語』の中でマラルメは、英語とフランス語とを比較しながら、そこに単にこの両国語にのみ固有な偶有的条件（両国語の地理的近接性や歴史的交流など）から結果しているのではない、言語の平行した進化の流れを認めている。「単純化という同じ現代的な思考が、『キングズブルーイングリッシュ』にならうとする『アングロサクソン語』

から最後の屈折を削ぎ取ったと殆ど同じ時期に、同じことを征服者であるバリの方言、すなわちイーールドゥフラン  
スの方言にも行つたのである。<sup>(89)</sup>」

当時の文法学者の多くが、この「単純化」の傾向を言語の歴史的变化一般に認めていた。そこから引き出されたのが、科学的と言うよりはむしろイデオロギー的な独特の言語観である。その突出した形をシュライヒャーに見出せるのだが、それを簡単に要約すれば次のようになる。

一、言語有機体説。言語は自然の有機体であり、ダーウイン的な決定論的進化の道をたどりながら成長し、発展の極に達した後は、衰えて死滅する。

二、言語類型論。言語の決定論的進化は、次の順をたどる。まず孤立言語（中国語のように、各々の語根が十全な独立性を保持したまま語として使用され、語の文法機能による区別などはまだない）、次に膠着言語（ハンガリー語のように、結合して語を形成する二つの語根のうち一方が、本来の意味を失って単なる派生の記号となつてしまつた）、最後に屈折言語（結合して語を形成する二つの語根が共にその独立性を失い、その結果、言述を構成する諸々の文法要素の明白な形式的区別が完成する）。印欧語族は、先史時代にその祖語において屈折言語の段階に到達し、したがつてその生命の横溢を極めた。

三、歴史時代における言語の墮落。印欧語族の進化の頂点は祖語にあった以上、歴史時代に入つてからの諸言語の歩みは墮落の途である。音変化が示している祖語の形式の崩壊は、この墮落の軌跡である。（なお、シュライヒャーが音論と生理学との関りを主張した背後には、この墮落＝音変化は、発音を楽にし、エネルギーを節約しようとする人間の怠惰さに起因しているという考え方があつた。）

さて、マラルメもこうした主張を情報として知っていたばかりでなく、更には科学的真理として一応承認してはい

た。たとえば、マラルメが諸國語について、「ドイツ語」(これは成熟に至る前に幼年時代と青年時代を経過したが、<sup>(90)</sup>些かもその個性は変らなかつた)、「英語」は今では変質しえないし、必ず来る老衰の時まで変質しないだろう」と、あるいは音変化について、「文字が最早個々に発音されなくなり、*o, a, n* 等のように何か墮落したものを「…」与える二重母音へと寄り集まっている、「…」<sup>(91)</sup>語を全部発音することを怠る、「…」あるいは更には語の一つ一つの子音を分節するのをすら怠るといった何かがある」と書く時、今強調した特定の言い回しは、比較文法から学んだものなのである。だが、マラルメ自身は、これらの主張を全面的に受け入れていたわけではなく、また受け入れた場合でもその主張に含まれている価値観は拒んでいる。

まず言語有機体説であるが、右にも例をあげたように、マラルメも一応それを採用している。だが、彼にとって言語とは人間の精神活動そのものの謂であつたのだから、言語が自然の有機体であるのは、人間がそうであるのと同じ意味においてのことになる。「自然そのものと類縁関係をもち、こうして生命を預かる有機体に接近している『語』は、その母音と二重母音においては肉として、その子音においては解剖すべき繊細な骨格として等々現われている。生命がその固有の過去に、すなわち継続する死に身を養っているのだとすれば、『科学』はこの事実を言語にも見出すだろう。言語は、人間をその他の諸事物から区別するものであるから、本質においては自然的であるに劣らず人工的な、宿命的であるに劣らず反省的な、盲目的であるに劣らず意志的なものとしての人間を、再び模倣することになるのだ。」<sup>(92)</sup>この発言には、言語を盲目的な決定論的進化の途をたどる、自律した自然有機体とみなす視点は認められない。言語がそのようなものであるとしたら、人間もまた自然に従属した意志をもたない存在となってしまうであろう。だが、「人間を意志に還元する」ものこそ、言語だったのである。

次に言語類型論であるが、マラルメは、言語類型論を絶対視して混合言語は存在しない(諸言語は、辞書の中でこ

そ混りあいはしても、決して文法において混りあうことはありえない<sup>(94)</sup>とするミュラーの見解を平然と無視して、この三類型を全て英語に適用する。孤立言語(「不変な『語』の純然たる孤立<sup>(95)</sup>」)が適用されるのは、単音綴語である。「英語は、『アングロロリサクソン語』から『キングズブリイングリッシュ』へ移行する時英語になったその本来の語彙において、『単音綴的』であり、また間投詞的でさえある。なぜなら、しばしば同じ一つの『語』が動詞にも名詞にも役立つからだ<sup>(96)</sup>。」膠着言語(「幾つかの『語』を対にして、意味は見分けられるようにしておく<sup>(97)</sup>」)に適用されるのは、複合語である。「『複合語』という、文学が記載し、また日々奔る語の中で、殆ど絶對的に膠着的特徴に出会わない人が、諸君の中に誰かいるだろうか<sup>(98)</sup>。」そして屈折言語(「全てが意味の消失それ自体にまで至り、思考が受け入れられる抽象的で無な残存物しか残さない状態<sup>(99)</sup>」)については、「最後に、屈折的狀態としては、格変化を保存する必要は少しもない。風格のSや代名詞の曲用のような格変化は、生きている。〔…〕『英語』は、『フランス語』と同様、共に語尾変化しうるものではなくなっている。だが、少しではあるが活用する。最後に、多くの『語尾』、とりわけ『指小辞』は、それ自体では文字が中立的になって脱落しているため、いかなる意味も含んではない<sup>(100)</sup>。」こうして、言語学が通時的関係において言語の三類型を共時的関係内に置換することによって、マラルメは、事実上言語類型論を骨抜きにしている。これらの類型間に言語学がたてた歴史的、階級的順位は、全く意味を失ってしまったのである。だが、代って言語類型論は新たな価値基準に従っている。それは再び言語の虚構(音の類似による觀念の創造)を原点とした基準である。孤立言語に擬せられている単音綴語とは、言語の形式的規則がともすれば隠蔽しがちな音と觀念との結合を剥き出しに提示する語であり、また膠着言語に擬せられている複合語とは、単音綴語の意味を積分して、全く思いがけない斬新な意味を、言語自体が企まずして産出した文彩として提示する語である。これに対して屈折言語に擬せられているのは、「抽象的で無な残存物」、つまり、語の自立も音と觀念との結合も失なわれて、純粹な形式を構成

するそれ自体では無な一要素となつてしまつた語なのである。

したがつて最後に、言語の墮落という考え方に対するマラルメの態度もまた、もはや明らかであろう。屈折の脱落到に端的に示されるような、言語の歴史的变化に認められる単純化の傾向は、言語を屈折言語の状態から遠ざけることによつて、音と觀念との結合を顕在化させる。したがつて、それは墮落であるどころか、逆に、言語をその最も本質的な状態へと純化する歩みなのである。

### 歴史・比較文法との対立

ここでとりわけ注意したいのは、言語のこの本質的狀態は、歴史・比較文法が想定していた言語の原初の状態とは峻別されるということである。言語は、その原初の状態においては音と意味との間の強い内的紐帯を所有していた、という想像が、文法学者の多くに認められるのだが、マラルメは単純化の傾向をこうした言語の歴史的起源への逆行と解していたわけではないのである。

このことは、マラルメがこの単純化の傾向を、また一方では言語自体の「文学的洗練」ともみなしていることによつて、はっきりと確認される。『英語の単語』の中でマラルメが共時態として切り取つているのは、「(10)「今日まで」の英語、すなわちキングズブライングリッシュであるが、それは、数世紀にわたる英語の歴史的形成過程が、言語をより単純なものにしようとする努力の末に終に到達した最終的な段階である。そして、そこにマラルメが見出しているのは、たとえば、音声言語における音と觀念との結合の最も成功したものであるオノマトペや反復語法が、またその最も洗練されたものである、「民衆の本能から奔り、何世紀もの流れに磨かれた」(11)諺、俚言、慣用表現が、いづれも、文字言語の最も意識的な洗練である文学が示しているのと同じ成果——形式の簡潔さ、言語の音楽性、形

式と内容との一致——を実現している、という事実なのである。<sup>(10)</sup> 言語自体が達成したこのような文学的洗練は、語彙のレベルにも行きわたっている。したがって、『英語の単語』の語彙分析は、言語学的諸法則をさしおいても、言語のこの「文学性」を最優先させることになるのである。

まず単音綴語の語族への分類にあたって、「語族の分類という」この複雑かつ単純な作業に類するものに成功するには、かなりの程度、戯れと名付けられるものが必要になる。あまりにも厳密にすぎるなら、法則よりもむしろ言語の確実で神秘的な多くの意図に背くことになろう。<sup>(11)</sup> 「現代言語学の諸原理の厳密な遵守は、われわれが文学的視点と呼ぶもの、つまりひとたび洗練された言語という視点の前では譲歩することになろう。本来的に言うなら、ここには原理のようなものは何一つない。問題となるのは『英語』の魂なのである。<sup>(12)</sup> 言語のこの文学性、「言語の確実で神秘的な多くの意図」の一つは、言語自体が実践している頭韻法、つまり語族の語である。だからこそ単音綴語は、常に語族の形で、換言すれば語頭の音に従って一つに集められた語のグループとしてのみ、提示されるのだ。言語の単純化は、語幹を剥き出しに提示するという形でこの頭韻法を際立たせるために、働いてきたのである。一見逆に思える働きが生み出したのが、複合語、つまり語の並置による新しい語の合成である。これもまた英語という言語の文学的洗練の極であることを、マラルメはドイツ語と英語とを比較しながら次のように説明している。「語の」並置は全くゲルマン的な性質であるが、『ドイツ語』ではそれが余りに優勢なので、たとえば『語』の配列に見られるある均一性のために雄弁さが傷つけられずにはいかなくなっていく。また脚韻が（頻出するために）貧しくなるので、詩人の困難を呼びおこしている。これこそ、おそらく、全く独自の文学にもたらされた大きな妨げである。「……」可動的だが安定しているその固有の土壌に『語の合成』がもたらした恒久的な、だが現在にも見られるこれらの更新のおかげで、『英語』という国語は、「……」この豊かさの中に幸福な度合を保っている。<sup>(13)</sup>



マラルメの言う言語の文学性の核となっているのが、言語の虚構（音の類似による観念の創造）であることは言うまでもないであろう。英語本来の語彙の分析においてたえず注意を払われていたこの視点は、英語が外国語の語彙を自らの裡に取り入れる作業を対象としている語彙分析においても、やはり守られている。たとえば接木（フランス語の語彙の英語化）に伴う語の形式面（音声面及び綴字面）での様々な、時には甚だしい変形（「厳密に言語学的観点からすれば非難すべき」<sup>(107)</sup>変形）を前にしながら、マラルメが「他の場合と同様に、英語においては完全に不条理に属するものは一つもない」<sup>(108)</sup>と断言するのは、本来のフランス語の語とそれが英語になったものとの間に、ちょうど語族の語の間に認められたのと同じ音と意味との平行した類似<sup>アナロジー</sup>を認めるからなのである。また、人工的・学者的形成（古典語の語彙の英語化）による語の「偽造」——と言うのも、それらの語彙は、フランス語がラテン語から派生したやり方を真似て語を直接ラテン語から引き出すか、あるいはフランス語の語彙を一度ラテン語に戻してから英語に取り入れることによって、したがってフランス語という（マラルメによれば）正当な媒介を経ないで、人工的に作りあげられたものだからである——において、マラルメが讃嘆するのは、ラテン語からフランス語が生まれた時に見失なわれた語の間の音と観念との平行した類似<sup>アナロジー</sup>が、英語において再興されているのを確認する時なのである。二つの例をあげよう。たとえばラテン語の FENDO から、フランス語は「それ程純粹ではない、『接辞』つきの語 *défendu*」しか得ていないのに対して、英語は TO FEND「打撃を払う、防衛する」を得、それを更に FENCE「防衛手段」、FENCING「フエニング」と変形してゆく。FENDO→TO FEND→FENCE→FENCING が、それに対応するフランス語の FENDO→*défendu*→*défence*→*escrime* にはない音と観念との平行した類似<sup>アナロジー</sup>を創造していることは明白である。あるいはまた、ラテン語の RAPTUS が、フランス語には *rapté* を残したのに対して、英語は TO RAP つまりフランス語の *rapté* を得、この語の「[肉体または魂を]奪う」という二重の意味においてフランス語の *rapté* をまきこんだ TO RAP「強奪す

る、夢中にさせる」-*vapir*「幼年者の」誘拐」-*Raptorial*「猛禽が」生餌を捕食する」-*Rapture*「恍惚、(人をも特に天上へと)運び去る」という、微妙なずれと重なりの中に裡を横すべりしてゆく語系列を展開している。<sup>(19)</sup> フランス語が *vapir* と *vaporis* との距たりの裡に見失なったものを、この語系列は再興しているのである。

マラルメが言語の本質的狀態を見出すのは、言語の歴史的形成過程が、「大人であれ子供であれ、人が自らの裡にもっている調和の本能」<sup>(19)</sup> に従う洗練の結果到達した、このような言語の文学性の裡になのである。だからこそそれは、文法学者が勝手に想像した言語の原初の状態とは、峻別されるのである。

このことが、『言語の科学』と歴史・比較文法との決定的な対立を浮彫りにする。現在から過去に関心の鋒先を向けて、常に現在の言語を祖語に還元しようとする比較文法の行き方にせよ、また逆に、音変化の規則性を過去から現在に向う決定論的進化の法則に照らして確立しようとする歴史文法の行き方にせよ、研究者の視線は、過去と現在とを結ぶ一本の歴史の線に沿ってしか動かない。それは、彼らが言語を自律した自然有機体としか見ていないからである。これに対して、マラルメは、人間の言語能力であり、したがって精神を構成する原理でもある「言葉」<sup>(20)</sup> の実現を言語に見い出すという全く対立する視点を提起する。この視点からすれば言語の歴史は、諸言語が「言葉」<sup>(20)</sup> を実現する様々なやり方をこそ示すものになる。そのことを、マラルメは次のように述べている。

「言葉」<sup>(20)</sup> は、いかなる原理をも否定するものである偶然を貫いて、「理念」として展開する一つの原理であり、「思考」が「時間の逆行」<sup>(21)</sup> によって形をなすように「時間」に助けられて「音声言語」<sup>(22)</sup> を形成していることに気がつく。時間は、「言葉」<sup>(20)</sup> の散りちりになった諸要素が、これらの多様化によって生じた諸法則に従って、互いを見出しあい、結びつきあうことを可能にするのである。<sup>(21)</sup>

「言葉」は「理念として展開する原理」である以上、常に言語として実現される。換言すれば、いかなる言語もそれ固有のやり方で「言葉」を実現しているのである。そのやり方は偶然に支配された関与的要因に左右されるところが大いなので、そこから諸言語の多様性が生じてくる。こうした多様な差異に基いて、一定の「法則性」を抽出し、この多様性に諸言語の類縁関係や語族という秩序を与えることができたのは、確かに歴史・比較文法の大きな功績である。だが、この秩序は、歴史・比較文法が主張するようなダーウィンの決定論的進化の秩序ではなく、諸言語が「言葉」を実現するそのやり方に関する秩序なのである。したがってマラルメは、言語が時間（歴史）の中にしかないことを認める点では、歴史・比較文法に同意する。「諸国語は、自然発生的に生まれるどころか、前の時代の国語の腐敗したまたは洗練された変形に他ならない。自然発生的なもの一つもない。新たな種族、つまり新生種族の幼子たちが、まだありもしないアゴラやフォーラムに集まって、一つの国語を発布したり公布したりすることなど全くないのだ。」<sup>(18)</sup>しかし彼は、問題となるのがこの歴史の中での変化であるということには、決して同意しない。「一般文法となろうとする歴史・比較文法」という言葉を想起しよう。問題となるのは、歴史の各段階における諸言語の全体の様相を通して、言語による「言葉」の実現を探ることなのである。『英語の単語』のような、『言語の科学』の予備的作業となる文献学的研究の任務について述べている次の一節も、それを確言している。「ラテン語」や『ギリシャ語のような古代の言語つまり死語の、また『英語』や『フランス語』のような現代の言語つまり現用語の、出現を研究する（昨日の科学である）『文献学』は、『言語の起源』に関する考察の中で踏み迷ったりせず、これらの言語が示している作業の正確な報告を行うのである。」<sup>(19)</sup>「言葉」という視点に立つなら、言語学の補助学問としての文献学の任務は、もはや対象となる言語の過去や起源を研究することにあるのでも、また単に一言語の語彙論的特異性を報告

するだけにとどまるのではなく、何よりも、その言語が「言葉」<sup>ワケモノ</sup>を実現するやり方にこそこの特異性は関っていることを明らかにすることにある。言語の文学性は、そこに位置付けられるのである。マラルメは、次のように語っている。「あたかも遠来の客のように思いがけずも到着するものであればあるほど、それだけいっそう幸福に辞項は結びつくものだが、それらの辞項を近付けて言語のもつ魅力と音楽とに協力させるのは、優越した自由な本能ゆえに、詩人の、更には巧緻な散文家の任務となるだろう。それこそが北方の精神に固有なやり方たる頭韻法であり、多くの有名な詩句がわれわれにその例を示してくれる。単に世界の諸現象の裡に閃く象徴に満足するだけにとどまらず、これらの諸現象とそれを表明する任を担った音声言語との間に一つの絆をうちたてようとする『想像力』のこうした尊大な努力は、死を招きかねない、『言語』の聖なる神秘に触れているのである。だから、『科学』が、かつてこの地上で話された諸国語の広大な目録を所有して、あらゆる時代を通じてのアルファベットの文字の歴史を書き記し、また、語の創造者である人間が、時には見抜き、時には誤解している、文字の殆ど絶対的な意味とはどのようなものであったかを書き記すような日が来るなら、単にその時にのみ、この神秘を分析するのは賢明なことであるとさえ言う。が、その時代には、これを要約する『科学』も、それを語る人物も、もはやありはしないだろう。そのようなことは『妄想』にすぎないのだ。目下の所は、この問題に対して美事な作家たちが投げかけている燦きで満足しよう。」<sup>(11)</sup>ここに、マラルメの詩人としての自負と同時に、言語の本質に対する視点を欠いて、歴史の中の言語の変化にのみ目を奪われている歴史・比較文法に対するひそやかな不信と侮蔑とを、読みとることができよう。

### 三、結論

これまでも折にふれて述べてきたように、『言語の科学』は実に多くの錯誤を含んでいる。それが、『言語の科学』

のもっている明白に現代的なもの、明白に正当なものを傷つけているのである。その中でも最も根本的なものは、歴史・比較文法から受けついだ物質主義的な言語観であろう。

マラルメは、言語を「言葉」<sup>ヴェルブ</sup>という理念の音的实现として定式化し、このことによって、人間生得の言語能力が精神を構成してゆくことを明らかにしようとして試みた。ここには確かにめざましく現代的なものが認められる。たとえばソシユールは、「ランガージュ」と「ラング」を区別して、次のように語っている。

ランガージュは、人類を他の動物から弁別するしるしであり、人類学的な、あるいは社会学的と言ってもよい性格をもつ能力と見做される<sup>(18)</sup>。

個々人には分節言語能力と呼ぶことができる一つの能力がある。……しかし、これはあくまで能力に過ぎず、外から与えられるもう一つのもの、すなわちラングなしにはこれを行使することは事実上不可能であろう。ランガージュは抽象的なものであり、それが現前するためには人間存在を前提とする。……〔……〕ランガージュは常にラングによって現前すると言えらるであろう<sup>(19)</sup>。

この「ランガージュ」と「ラング」の区別は、原則的にはマラルメの「言葉」<sup>ヴェルブ</sup>と「言語」との区別に対応するもののように思われる。なぜならマラルメは、「言葉」<sup>ヴェルブ</sup>は「理念として展開する原理」であり、常に言語によって実現されるとしているからである。またソシユールは、言語がその外に前以て存在している事物や観念の表現であるどころか、逆に言語こそが観念を創造するものであることを、次のように語っている。

心理的に、言語を捨象して我々が得られる観念とは何であろうか。そんなものはたぶん存在しない。あるいは存在しても、無定形と呼べる形のもにでしかない。「…」言語記号が登場する以前の思考には、何一つとして明瞭に識別されるものはない。これが重要な点である。<sup>(11)</sup>

これもまた、マラルメの言う「精神の展開方式そのもの」としての言語の虚構という考え方と合致している。したがって、この点では『言語の科学』は、明白に、また正当な仕方でも、歴史・比較文法の限界を乗り越えてきていると言えることができるだろう。

だが、この現代性も直ちに、擬似科学的な物質主義に搦め取られてしまうのである。それはたとえば、『言語の科学』が、「言葉」は「物理学と生理学」によって説明されると期待する点に、認められる。確かに、人間の言語能力それ自体は形而上学的・神学的ではなく自然科学によって説明されなければならない。だがそれは、マラルメが「物理学と生理学」あるいは「歴史生理学」と言う時念頭においている調音という生理的行為による説明を意味するのでは、全くないことは言うまでもないのである。

それ以上に問題なのは、「言葉」の音的实现を言語にとって本質的なものとみなす考え方である。確かに、自然言語は全て音声言語という形態をとっている。ここから、マラルメは、観念の創造にとって音声手段は不可欠なものであると結論し、更にはこの両者の間には必然的な絆があるものと論を進めて、調音という生理的行為に「言語の聖なる神秘」を解く鍵を求めたのである。この限りでは、彼は、むしろ積極的に、言語の音的側面を、実質としての物理的言語音として捉えたのだと言ってよい。だが、観念の領域がそうだったように、「音の領域においてもまた、あらかじめ区切られた、はっきりと識別できる単位は存在しない。」問題となるのは純粋な形相としての聴覚映像(能

記) だけである。実質としての物理的言語音は、形相としての能記が存在して初めて、「それ自体においては思考と同じように混沌たる物質」<sup>(10)</sup>である物質的音声から、その抽象として切り取られるものなのである。したがって、自然言語が音声言語であるのは、単に現象としての事柄であって、偶然の結果に他ならない。「言語を他の記号学的体系から遠ざける全てのものは、それが一見より重要なものに思われても、その本質を究めるためには、最も本質的でない現象として斥けられねばならない。たとえば、発声器官の働きがそうである。これを用いずに全く別の手段に訴える記号学的体系はいくつもある。」

問題は実質ではなく形相である。言語を考えるにあたって最も重要なこの視点をもちえなかったことが、したがって『言語の科学』の致命的な欠陥となる。というのも、形相という視点からのみ、言語の本質——社会的契約としての言語、示差的・対立的な価値の体系としての言語、非自然的・恣意的な記号学的構成原理としてのラング、要するに一言で言えば文化(反自然)としての言語——が明瞭に視野に収まるからである。反自然性こそが、言語の虚構の、したがって人間の精神の、本質なのである。このことをソシュールは、恣意性の原理を導入しながら次のように説明していた。ソシュールは恣意性という用語を二つの意味で用いているのだが、そのうち第一の意味での恣意性は、能記/所記結合の恣意性である(「与えられた聴覚映像と特定概念を結ぶ絆は、そしてこれに記号の価値を付与する絆は、根底的に恣意的な絆である」<sup>(11)</sup>)。これに対して第二の意味での恣意性は、個々の辞項のもつ価値の恣意性である(「言語事実がその間におきるこれら二つの領域(思考と音)が無定形であるばかりか、二つを結ぶ絆の選択、価値を生み出す二つの領域の合体は、完全に恣意的である」<sup>(12)</sup>)。このうち重要なのは後者であり、前者は後者の結果にすぎない。第二の意味での恣意性は、記号学的構成原理としてのラングが、言語外現実としての自然の無定形な連続体に、能記と所記との両面で投影する、示差的・対立的な価値の網目の恣意性である。通常人間が「現実」として捉えてい

るものは、この恣意的な網目によって切り分けられ意味を与えられた現実なのであり、言語外的な連続体としての現実そのものは、決して人間の意識には到達しないのである。この第二の意味での恣意性、つまり価値の恣意性の原理に従っているからこそ、言語は、また言語を通してしか現実を把握しえない人間の精神は、本質的に反自然的なものなのだと言える。したがって、言語の音的側面による觀念の創造（言葉<sup>ゴツク</sup>の実現）は、またそれによって可能となる人間の物質的（自然的）次元から精神的（文化的・記号学的）次元への飛躍は、調音という自然的必然としてではなく、文化的必然として、ソシュールの言う価値の恣意性によって、説明されねばならなかったのである。

『言語の科学』は、こうした致命的な錯誤のために、科学としては成立しえないものとなっている。だが、だからと言ってマラルメの試みが全く無価値であるとは言えないだろう。ここで注目したいのは、マラルメが『英語の単語』で注意を促している、言語自体に認められる文学性である。

既に見たように、ソシュールは恣意性の原理によって、言語が示差的・対立的価値体系であることを明らかにした。これは、言語の考察においては、個々の語をそれ自体として取りあげても無意味であり、常に語相互間の関係を問題にしなければならない、ということを意味している。ソシュールは、この関係が二通りの形をとり、各々が言語の異なるレベルに位置付けられることを指摘している。一つは、言語の顕在的レベルにある連辞関係であり、個々の要素を時間的（空間的）線条性に従って結合させることによって、諸要素を示差的・対立的関係内におくものである。もう一つは、潜在的レベルにある連合関係、すなわち、ある点では等価であり別の点では異ってもいるために、連辞関係を構成する際には相互に排除・対立しあうことになる一定の要素群内部の示差的・対立的関係である。ヤコブソンが、この二つの関係を各々結合（隣接性）と選択（類似性）と言いかえ、一方では失語症患者の言述、他方では文学、絵画、映画、更には魔術儀礼や無意識の言語活動たる夢にまでわたる、最も広い意味での人間の言語活動の諸相が、常



にこの二つの関係に従っていることを明示したのは、今や有名なことである。

こうした周知の事柄を今更らしくも出したのは、この二つの関係によって『英語の単語』の語彙分析を照射するためである。まず連辞関係について見ると、マラルメがそこで口をきわめて称讚している英語の複合語合成能力は、連辞関係による言語の文学的洗練であると解することができる。マラルメはこう語っている。「『複合』という素晴らしい賜物のおかげで、そのゲルマン語の出自から絶えず若返りを引き出している英語は、TO UNSEX (dessexer) を創造するシェークスピアの天才や UNSEAWORTHINESS によって航海に耐えられない、船舶を非難するよう昨日要請した新聞の性急さによって、その語彙の宝庫を無限に増大させることができる。このような幸福な結びつきは、時として敢えてそれを試みる作者や時代の人々を超えて生きのび、辞書の中に席を占めるのである。こうした結びつきは、時によっては忘れられたり、あるいは知られてさえいないこともあるが、それでもやはり一時は自由に奔り出た斬新で有用で魅力的なものなのである。それは、翼のある音声言語にとってふさわしからぬことではないのだ。」<sup>(12)</sup>また、前にあげた幾つかの例から分るように、マラルメは、語族の語の分析においても、接木や古典語の偽造の場合でも、常に言語の音的側面と観念との平行する共通性を複数の語の間の関係から導き出しているが、それらの語が、同一の語根から派生した同族語であったり、あるいは外国語の語彙の英語化であったりする場合には、その関係は隣接性による関係である。

他方連合関係(選択・類似性)であるが、実はこれは連辞関係(結合・隣接性)よりもマラルメの語彙分析においては重要な役割を演じているように思われる。と言うのも、語族の語彙の分析においては、註(58)で述べたように、明らかに同族語とは割り切れない語族が全体の四〇%弱を占めているからである。その一例は、Bの語族の低位集合の一つである BAT「棍棒」の語族である。そこには TO BEAT「打つ」、BATE「襲撃」、BETTLE「木槌」と並んで、

「*bat*」蝙蝠、飛ぶ時に空気を打つ」が集められている<sup>(124)</sup>。このようなケースの存在は、マラルメの語彙分析においては、したがってマラルメの言う言語の文学性にとっては、類似性による関係が隣接性による関係よりも支配的であったことを示しているのである。

更に興味深いことには、ヤコブソンが隣接性の異常を示す失語症患者の言述に認めている特徴の一つである失文法症が、マラルメによる英語の語彙と文法との分析結果にも読み取れるのである。

ヤコブソンによれば、隣接性の異常は、語をその上位単位である文へと結合する操作に損傷を与える。文は単語の集積へと退化し、接続詞、前置詞、代名詞、冠詞のように純粋な文法的機能を表わす語は消失する。「この病患の進行した症例では、各発話が一語文に縮小してしまう<sup>(125)</sup>。」マラルメは、似たような特徴を英語の語彙と文法に見出している。列挙しよう。「定冠詞は、固有名詞と同じく抽象名詞の前で「*the*」また一般的にとらえられた一切の名詞の前でも消失する<sup>(126)</sup>。」「接続詞の *that* は、極めてしばしば関係代名詞の *that* と同様省略される<sup>(127)</sup>。」「フランス語には四つの活用があるが、英語の動詞は一つしか活用がない。あるいは本来的に言えば活用をもたない。というのも、英語には動詞は些かもないと行ってよいだろうからだ。実際しばしば動詞は実詞と同じ語である<sup>(128)</sup>。」「英語の動詞は本来的に言うなら動詞ではない。なぜなら、動詞の単純時称の人称は、互いの間で特定の語尾によって区別されないからである<sup>(129)</sup>。」「他動詞の極めて明白な能動の意味を与えようとしたら、それに動詞 *do*, *faire* を先行させねばならない。」「*do* *hear*: *certain, j'entends* (*je fais l'acte d'entendre*)」<sup>(130)</sup>これではまるで文は実詞の羅列のような印象すら受ける。だが、それどころではない。「これらの語の多くは、その最も単純な表現に還元されており、同時に『名詞』にして『動詞』である。「*the*」『英語の語』は、その機能においても外形においても非常に原始的であり、一種の間投詞の状態にある。冠詞や前置詞がそれにある特定の機能を割りあててなのだ<sup>(131)</sup>。」「

同じ異常が、語とその下位単位である形態素との関係に影響を与える場合がある。「失文法症の典型的な特徴は、屈折の廃棄である。さまざまな不定形動詞形の代りに不定詞のような無標 unmarked の範疇が現われる。」<sup>(137)</sup>これもまた、マラルメが英語について繰り返して述べていることである。「本来的に言う未来はない。未来は、しなければならぬのか、する意志があるのかによって、*shall* もしくは *will* を次のように分配して、未来の意味を翻訳して形成する。『…』動詞自体は不定詞である。」<sup>(138)</sup>「条件法は、未来のために用いられた動詞 *will* と *shall* の過去形 *I would, I should* と *do* なしの不定形の動詞から形成する。」<sup>(139)</sup>「規則動詞の接続法は不定形だけしかない。」<sup>(140)</sup>「疑問は、代名詞の前に置かれる *do* に助けられて作られる。 *Do you hear, faites-vous l'acte d'entendre, c'est-à-dire entendez-vous?* 言うまでもなく、ここでは肯定や否定の場合と同じく *do* のみが活用して、続く動詞は不定詞の時と同じである。」<sup>(141)</sup>

ヤコブソンがあげている特徴の中に、もう一つ興味深いものがある。「派生語がその構成要素の意味からは完全に推論できないような意味的単一を構成する場合」<sup>(142)</sup>、隣接性の異常は派生語の理解を妨げる。この特徴を、英語の豊かな派生語合成能力を前にしたマラルメの讃嘆の中に、読み取ることができないだろうか。たとえば、ある派生語を前にして、マラルメはこう語っている。「『語幹』と『接辞』を並列したことから結果する斬新で驚くべき意味は、決して説明できないものではない。だが、どうやってそのような意味を予見できるだろうか。つまり、*ROBE* が『素条』を意味するのに *ROBE* が『ねばねばする』になるということを、どうすれば前以て公式だてられるだろうか。」<sup>(143)</sup> 逆に、類似性の異常を示す患者にとっては、ある語と連合関係におかれる語は「余剩的」<sup>(144)</sup>であり、抑圧されてしまうこと、したがって、ある語を別の語で代置したり、類語反復を行ったりはできなくなることや付言しておこう。このような代置や反復は、マラルメが英語の語彙の中に見出している、言語自体が実践する頭韻法と、密接に関わっているものだからである。

以上の考察から導き出されるのは、マラルメが言語をとりわけ連合関係において捉えようとしている、ということである。<sup>(19)</sup>換言すれば、マラルメの言う言語の文学性とは、言語の連合関係の豊かさに他ならない。したがって、彼が主張する言語の音的側面による観念の創造も、語群を一つの連合関係へと結びつける絆として捉え直すことができる。だが、このように連合関係を偏重することに、いかなる意味があるのだろうか。

言語は、「言葉」<sup>ヴェーブル</sup>という人間固有の言語能力の実現であり、精神の展開方式そのものであるはずだった。だが、現実の言語は、惰性化した構造となつて、その本来の恣意性を掩蔽しつゝ、精神の自由な展開に対する強力な拘束として働いている。これは、裏を返せば、言語自体が、精神の活動であるどころか、単なる意思伝達の道具に成り下つているという状態に他ならない。こうした状況の中で、言語の潜在的な連合関係に照明をあてることは、言語の本来的な恣意性を明るみに出し、構造として凍りついている言語を再び流動的なものに返すという戦略的有効性をもっている。言語が流動的なものに返されて初めて、人間の精神は、言語の恣意性を利用して、より自由な展開を無限に追求してゆくことができるのである。

物質の一形態にすぎないという虚無から自由になる途を求めて、言語を唯一の武器としつゝその詩的言語の探求にのりだしたのである以上、マラルメが、『言語の科学』を計画し、また『英語の単語』その他の著作を書きつゝ常に目指していたのも、このことだったと言つてよいだろう。確かに、彼が犯した多くの錯誤は、彼のこの目的を理論的著作として結実させることを妨げている。したがって、完成した著作である『英語の単語』や『英作文集』が実際に行っているのは、非常に慎ましい事柄でしかない。それは、一人の詩人が、英語という一言語に耳を傾け、身をもつて聞き取ったこの言語の潜在的連合関係(言語の文学性)に光をあてることによって、言語がその本来の恣意的な姿において、いかに自由奔放な流動性に身を委ねているかを明示してみせることにすぎないのである。だが、この作

業を通じてマラルメは、詩的言語とはいかなるものであるかを確実に把握したのだ、と言うことはできる。一九七一年四月三日付の書簡は、そのことを「純然たる文学者に戻った」マラルメ自身の言葉でこう語っている。

この批評（「危機」）の時間が稲妻となつて、何度となく危険にさらされた四年間の私の夢だったものを再び見せてくれる。今や殆どそれを手にしているのだが、すぐに着手するかと言えば、否だ。まず必要な才能を私に与えねばならないし、私のこのものは熟して不易なものであるが、本能的なものにならねばならないのだ。殆ど前の時代からあるもののように。だから、昨日できたもののようにではなく。<sup>(4)</sup>

「本能的な、殆ど前の時代からあるもののような、だから昨日できたもののようなではない」言語。したがって詩的言語とはもはや、個人としての詩人が自らの思考や印象を述べる道具ではありえない。いや、そもそもそれは個人としての詩人に固有の言語であつてはならないのだ。詩的言語とは、それが属している一言語の連合関係によつて保証されている言語自体の文学性を、十全に汲みあげ、顕在化させるような言述を構成してゆく作業なのである。<sup>(4)</sup>したがつて、逆に言えば、そのような作業はそれがいかなる形を取ろうとも全て詩的言語となるであろう。その本質においては、言語それ自体が詩なのである。

主体である「私」の非人称化も、今述べたような意味での詩的言語においてこそ、初めて完全なものとなる。なぜなら、その時、この言語を書き記す個人的・人称的主体としての詩人（それがステファヌ・マラルメと呼ばれるかどうかはもはや問題ではない）は、言語をこのように豊かな文学性を有するものへと洗練させてきた（そして、これからも洗練させ続けていくであろう）音声言語と文字言語との全ての主体が合流する、いかなる意味でも個人性・人称

性をもたない、広大な創造力の中に、自らも一箇の匿名なものとなって溶けあい、消し去られているはずだからである。それこそが、言語の歴史の中で詩人の光輝ある運命だったのでなかったらうか。

この广大で匿名の創造力を、『最新流行』のコラム「教育について」は、「大人も子供も、人が自らの裡にもっている、調和の本能」と呼んでいた。やがてそれは、無限の産出力を秘めながらも、まだその十全な発露の形態をもたない、匿名な大衆というイメージの裡に形象化されることになる。そして、詩は、単に詩篇に、<sup>#ヒトシ</sup>更には文学一般にすら極限されない、この广大で匿名の創造力が発現する一切の手段——そこには、演劇・マイム・舞踏のような諸パフォーマンスが、音楽が、また典礼が、そして衣裳のモードまでもが含まれることになる——を包括する名称となるのである。その時、『作品』の構想は、それら全てへと通底するものとしての『書物』というその最終的な形態を、はつきりと自らの射程内に収めることになるであろう。

(1) cf. Stéphane Mallarmé: *Œuvres complètes de Stéphane Mallarmé*, Gallimard, “Bibliothèque de la Pléiade”, 1945 (以下 O. C. と略す) pp. 849-956. #また Stéphane Mallarmé: *Œuvres complètes de Stéphane Mallarmé*, Gallimard, “Collection Poésie”, 1976 (以下 I. D. U. と略す) pp. 377-387. ただし、これらはいずれも、年代の異なる二種の断片的ノートからなっている。本論考では、そのうち一八七十年のノートだけを問題にする。またフレイヤード版『全集』のテクストとポエジイ版のそれとを比較対照すると若干の異同が認められるので、本論考では『ノート』に関してはポエジイ版を底本とする。

(2) ここでは書名と刊行年もしくは原稿が書店に渡された年月のみをあげておく。Les Mots anglais, Petite Philologie anglaise de l'usage des classes et du monde, 1877; Ce que c'est que l'anglais, 1878, avril; New English Mercantile Correspondence, 1878, juin; Les Beautés de l'Anglais, anthologie de l'usage de la jeunesse, prose et vers en un volume, 1878, juillet; Thèmes anglais, 1879, juillet; Boîte pour apprendre l'Anglais en jouant et seul (一八八十年にラルメが書店に売りこいたアイデア); Recueil de “Nursery Rhymes”, (C. P. Barbier による) 一八八一年頃の未発表原稿。cf. Stéphane Mallarmé:

- Recueil de "Nursery Rhymes", texte établi et présenté par Carl Paul Barbier, Gallimard, 1964, p. 11.); Manuel de phrases de Sadler, révisé et corrigé par Mallarmé, 1881, avril; Grammaire pratique de la langue anglaise de Sadler, corrigée par Mallarmé, 1882, juillet; Favourite Tales (Les Contes favoris) de James Stephens, préfacés, annotés et corrigés par Mallarmé, 1885.*
- (3) 一八六六年四月二十一日(二十八日)付カザリス宛書簡。Documents Stéphane Mallarmé (以下 D. M. 七略十) tome VI, Nizet, 1977, p. 308.
- (4) 一八六六年七月十三日付カザリス宛書簡。Ibid., p. 321.
- (5) 一八六六年五月二十一日付カザリス宛書簡。Ibid., p. 318.
- (6) Ibid.
- (7) 一八六六年七月十六日付オーバネル宛書簡。Stéphane Mallarmé: Correspondance 1862-1871, Gallimard, 1959, (以下 Corr. 七略十) p. 222.
- (8) 一八六六年八月八日付オーバネル宛書簡。Ibid., p. 226.
- (9) D. M., tome VII, pp. 223-224.
- (10) 一八六七年五月十四日(十七日)付カザリス宛書簡。Ibid., tome VI, pp. 340-341.
- (11) I. D. U., p. 379.
- (12) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店 一九八一年 三〇四頁
- (13) たとえば、「私は死んで、精神の最後の筐の寶石でできた鍵をもって蘇った。」「私は実に美しいものを作ることができる。それはまだ夢だが、しかし、私の裡で夢見られ、私がそれになるのだ。」(傍点筆者)。
- (14) 拙論『イジチュール』或いは無名の夜々『駒沢大学外国語部論集』第十七号 昭和五八年 一一〇—一一八頁を参照のこと。
- (15) 一八六七年五月ルフェビュール宛書簡。Corr., p. 246.

- (16) 一八六七年九月二十四日付ヴィリエッドロラダン宛書簡。 *Ibid.*, pp. 238-259.
- (17) 一八六七年五月十七日付ルフェビュール宛書簡。 *Corr.*, p. 246.
- (18) マラルメにヘーゲル哲学を紹介したのが、前六六年六月末にマラルメ宅に滞在したルフェビュールであったことは、既に多くの研究者が指摘している。この年マラルメと会う機会をもてず、マラルメ宅からパリに戻ったルフェビュールから消息を得るにとどまった、ヴィリエ及びカザリスのマラルメ宛書簡から見ると、マラルメはヘーゲルにかなりの興味を示したらしい。「ヘーゲルについては、貴君がこの天才に何がしかの関心を寄せられた由、まことに結構に存じます。」(一八六六年九月十一日付ヴィリエよりの書簡。 *Corr.*, p. 231, N. 1)「ヘーゲリアンらしく自若としていたまえ——だって君はヘーゲリアンなんだから。ヘーゲル主義はまさしく君を夢中にさせる宗教だよ。」(同年九月または十月のカザリスよりの書簡。 *D. M.*, tome. VI, p. 333) マラルメ自身は同じ頃こう語っている。「私の精神は曇ってしまい、以前の明哲さへ向う努力を全く拒んでいる。悲しい気持でそれを運命と諦め、本の山に囲まれているのだが、ページをめくっては目を走らせるだけで、読み終える気力もない。実を言うと、それは科学と哲学の書物だ。それを私は、味わいたいのだ——一つ一つの概念を私自身で。だから概念を覚えようというのではない。」(一八六六年八月二三日付オーバネル宛書簡。 *Corr.*, p. 231) デイヴィスは、この哲学の書物が『精神現象学』であったろうと云う。 cf. Gardner Davies: *Mallarmé et le rêve d'Hérodiade*, José Corti, 1978, p. 19.
- (19) 一八六七年五月十四日(十七日)カザリス宛書簡。 *D. M.*, tome. VI, p. 343.
- (20) 'Le Livre, Instrument spirituel' dans *I. D. U.*, p. 267.
- (21) 付言すれば、ヘーゲル哲学を言わば換骨奪胎して、美の創造の弁証法的プロセスに適用したこの図式は、当時としては些かも奇矯なものではない。それどころか、マラルメが『ミロのヴィーナス』、『ジョコンダ』、『作品』の三段階によって開陳したこの図式は、素朴で豊饒だが無意識的な古代的 spirit と、冷冽で分析的だが不毛な近代的 spirit との統合という、十九世紀の思潮を貫く試みの中に、位置付けられうるものなのである。これについて、ロベール・ジルがオースティン・ジルの研究を踏まえながら論証しているところによると、たとえばルナンが、『科学の未来』において、人類の精神史を明らかにヘーゲルの図式を借りた進化の三つの段階、すなわち「融合の時代」、「分析の時代」、「統合の時代」に区分していた。ルナンはまた『言



語の起源について」でも、「幼年時代の力強いが混乱した直観に続くのが、明哲だが基礎付けるのは不得手という分析的視野である。分析の後に来るのは、学識に裏付けられた統合であろう。それは、素朴な統合が盲目的宿命の命ずるままに行ったことを、十全に意識的に行うのである」と述べている。(Robert Giroux: *Désir de Synthèse chez Mallarmé*, Naaman, 1978, pp. 35-36) またジルは、ボードレーにもルナンのこの三つの歴史的段階が美学に置換されていることを示し(『Ibid.』, p. 32, N. 2)、「また、『ミシユレも『科学と幼年期とを同時に含む』時代を予告していた」というジルの言を引きながら、「様々なレベルにおいて、似通った関心を切り取りながら、十九世紀フランス全体が人類のこの叙事詩に関心を抱いていた。この全体性の神話は、メナール、クリュザール、バランシュ、ミュラー、ブレアル、コックス、ワグナー等によって担い伝えられたのである」と述べている。(『Ibid.』, p. 36, N. 7) ここで確認しなければならないのは、次の二点である。まず、マラルメが『作品』の構想にあたって定式化した図式それ自体は、十九世紀の思想的文脈内にある。次に、この文脈はだが古代的精神と近代的精神との統合を果たすものを詩には求めなかったのに対して、マラルメは、それをまさしく詩のみがなしうることで確信している。したがって、マラルメにおいては全てが(ミュラーの言語も、ブレアルやコックスの神話も、ワグナーの音楽と伝説との結合も)詩の相の許に見られることになろう。まさにこの確信がマラルメを言語の研究へと促がし、また言語の研究はこの確信の正当性をマラルメに教えることになる。ここで、シモーヌ・ヴェルダンがあげているポーの『マーシナリア』に読まれるテニソンのシェリー読書に関する次の一節を、この同じ文脈内に置いてみることは、興味深い。(cf. Simone Verdin: *Stéphane Mallarmé Le presque contradictoire, précédé d'une étude de variantes*, Nizet, 1975, p. 27) 「(テニソンのシェリー読書の) やり方は未だ完全たるに程遠い。そして、幾分かはかかる理由故に、だが主としてこの知性と道徳との結合は単なる偶然であったが故に——と言うのもこの結合は、(もしいつかなされるならば) 一人の人間の裡にシェリーの奔放とテニソンの詩的センスとを必ずや統合するであろうし、そこには、『本能』と『分析』とに基く) 最も深遠なる『芸術』が、また、全てを正當に融合し厳密に制御せんとする最も堅固なる『意志』が伴うであろうから——繰り返して言うが、主として一見相対立するが如きこれら両特質のかかる結合は『幸運なる偶然』にすぎないであろうが故に、世界は、"ことによれば構成されるやもしれぬ、最も高貴なる詩篇に、未だ相まみえてはいないのである" (Edgar Allan Poe: "Shelly" in *Marginalia*,

Everyman's Library, No. 791, London, 1969, p. 322.) ※この一節は、もしかしたらマラルメの念頭にあったかもしれ  
 ず。

- (22) 一八六七年五月二九日付カザリス宛書簡。D. M., tome VI, p. 348.
- (23) "Crise de vers" dans I. D. U., p. 250.
- (24) 一八六八年四月二十日付フランソワ・コン宛書簡。Corr., p. 270.
- (25) Stéphane Mallarmé: *Œuvres complètes*, tome I, *Poésies*, Flammarion, 1983, p. 220.
- (26) D. M., tome VI, p. 369.
- (27) *Ibid.*, p. 375.
- (28) 六四―六六年の『エロディアド』におけるマラルメの詩的言語実践に関しては、左記の拙論を参照のこと。『エロディアド』の構想の初期の展開「関東学院大学文学部紀要」第二八号 昭和五五年 一七―六六頁。「一八六五―六六年のOp-venture ancienne」『駒沢大学外国語部論集』第十二号 一九八〇年 二二―二四頁。「マラルメの *Hérodiade* について——初期の構想における『詩の誕生』の主題——」『フランス語フランス文学研究』第四一―号 日本フランス語フランス文学会 一九八二年 一一―二頁。
- (29) 一八六九年二月十八日(十九日)付カザリス宛書簡。D. M., tome VI, p. 420.
- (30) 一八六九年一月七日付カザリス宛書簡。Ibid., p. 408.
- (31) 一八六九年二月十八日(十九日)付カザリス宛書簡。Ibid., p. 421.
- (32) 一八七〇年三月二五日付ルフェビュールからの書簡。Corr., pp. 319-320, N. 1.
- (33) 一八六九年十二月三一日付カザリス宛書簡。D. M., tome VI, p. 431.
- (34) 一八七〇年三月二十日付ルフェビュール宛書簡。Corr., pp. 317-318.
- (35) 一八六一年に初版が出、英語版でも数版を重ね、各国語に翻訳されたシュラーのこのベストセラーの仏語版を、マラルメが所有していたらしいことは、一八七一年十二月のルフェビュールからの書簡によって、指摘されている。Cf. Jacques Mi-

- chon: Mallarmé et "Les Mois Anglais", Les presses de l'Université de Montréal, 1978, p. 30.
- (36) 田代ハヤトニシ『Fragement d'une étude scénique ancienne d'un Poème de Hérodote. cf. Stéphane Mallarmé: Œuvres complètes: tome I, Poésies, Flammarion, 1983, pp. 228-232.
- (37) 一八七十年四月三日付カザリス宛書簡。D. M., tome VI, p. 440.
- (38) 一八七一年三月三日付カザリス宛書簡。Ibid., p. 455.
- (39) Ibid.
- (40) 『ノート』I. D. U., pp. 377-378.
- (41) Ibid., p. 378.
- (42) Ibid., p. 379.
- (43) Ibid., p. 377.
- (44) Ibid., p. 381.
- (45) Ibid., p. 382.
- (46) Ibid.
- (47) Ibid., p. 380.
- (48) Ibid.
- (49) Ibid., pp. 380-381.
- (50) ポール・ロワイヤルの『論理学』は、「主知主義的な言語命名論の立場から、「ある観念を外ならずある一定の音に結び合わせることは確かに全く恣意的であるが、観念は決して恣意的なものではない」と述べている。(ポール・リーチ編『ポール・ロワイヤル文法』南館英孝訳大修館書店一九七二年一八三一—一八四頁。)これとは全く対立的な立場から、ソシュールは能記／所記結合の恣意性(第一の恣意性)を、形相的価値体系としての言語が能記・所記の両面において切り取る価値の恣意性(第二の恣意性)の結果として説明している。マラルメの立場は、このいずれにも属さない。既に述べたように、彼は、観念を

ア・プリオリに分節されているものとは考えていなかった点で、主知主義的言語観を乗りこえている。他方、後述するように、『言語の科学』には、言語を形相として捉える視点は欠如しているのである。

(51) 『ノート』I. D. U, p. 383. なお、付言すれば、フランス語では通常大文字で書かれる Verbe は「神の言」という意味をもっているのだが、「ここではその訳語は採らず、この語を、訳文でも本文でも常に「言葉」と「くへり」ノビを付して示すことにした。」と言うのも、同じ一節の中で、「この語の他に、『Devenir』、『Idée』、『Temps』、『Langage』、『Être』、『Vie』、『Esprit』、『Parole』、『Ecriture』の語が、またそれに後続する一節ではそれらに加えて『Pense』と『Achronisme』の語が、各々大文字で書かれていることからみて、「この語が「神の言」という意味で用いられていることを示すために大文字で書かれる」とは、考えられないからである。

(52) *Ibid.*, p. 384.

(53) 『英語の単語』O. C., pp. 932-933.

(54) *Ibid.*, p. 933.

(55) 第一の反応の例としてジャック・シヤールを (cf. Jacques Scherer: *Grammaire de Mallarmé*, Nizet, 1977, p. 20 et p. 45.) 第二の例としてジャンニョール・リシャールを (cf. Jean Peire Richard: *L'Univers imaginaire de Mallarmé*, Seuil, 1961, pp. 527-536.) 第三の例としてマリブ・クリスタツトを (cf. Julia Kristeva: *Révolution du Langage poétique*, Seuil, 1974, 以下 (R. L. P. を略記する) pp. 226-229 et pp. 236-238.) を、各々あげておく。

(56) 『英語の単語』O. C., p. 918.

(57) *Ibid.*, pp. 918-919.

(58) このことを強調しておく必要があるだろう。と言うのも、語族の分類については、たとえば次のような発言が認められるからだ。「マラルメは、語源学者が与えるばらばらな所与を系列化して、そこに連続性の法則、知解可能性の原理を導入することによって、それらの所与を、虚構的に、補完しようとしている。[...] 語は一見多数あるように見えるが、その多数性の中に、マラルメは、語を相互に正当化している恒久性、派生、類似を見抜くのである。マラルメが《接近を正統化する類似の

根拠》を求めるのは、『記憶をこえた共通な起源に』ではないだろうか。』(Robert Giroux, *op. cit.*, p. 137.) 確かにマラルメは、「接近を正統化する類似的根拠は、共通の太古の起源にこそ求められねばならぬ」(O. C., p. 922) と語っているが、それは、類似的根拠を「共通の太古の起源」には求めないことを断言するためのものである。このことは、マラルメが提出している語族の語の語源を調査してみれば確認される。その際最も望ましいのは、マラルメが『英語の単語』を書くにあたって参照したと分つてゐる『チェンバース語源辞典』(*Chambers's Etymological Dictionary of the English Language*, edited by James Donald, London & Edinburgh, W. & R. Chambers) 第二版、一八七二年を見ることである。が、この辞典は残念ながら入手できなかったので、ここでは左記の辞典類に拠つて調査を行った。

ORIGINS, a short etymological dictionary of modern english, by Eric Partridge, Routledge and Kegan Paul, London, 4th edition, 1966.

*An Etymological Dictionary of the English Language*, by Rev. Walter W. Skeat, Oxford, 4th edition, 1910.

*The Oxford Dictionary of English Etymology*, edited by C. T. Onions with the assistance of G. W. S. Friedrichsen and R. W. Burchfield, Oxford univ. press, 1966.

その結果、マラルメが提出している全体で四百一語族中、共通の語源から派生した同族語の語族二三八例、語源を全く異なる語の語族七四例、語族中の幾つかの語については同族語の関係が認められるが、同族語ではない語も含まれている語族八九例が、各々数えられた。つまり、全体の約四十%弱が、同族語とは異なる語の集合なのである。それらの中には、語がその語源の意味ではなく現在の意味で採られている例も認められる。一例をあげれば、crew は「船の乗組員」という一四五五年に文証された意味で crowd 「群衆」の語族に加えられている。

(59) 『英語の単語』O. C., p. 922. 「とりわけ気をつけてほしいのだが、ここで何行かにわたつてラテン語やギリシャ語の語が現われても、そのことは、どのようなものであれ添付されている英語の語がそこから出自している、という事実を含蓄すると思ひこんでしまわないように。(少くとも) 英語には歴史的な関係などというものは無い。そして、そのような接近を正統化する類似的根拠は、共通の太古の起源にこそ求めねばならないからである。』(*Ibid.*) また、「一つの言語に属する何千かの語は

互いに類縁関係にある。要は始まりと終りを知ること、換言すれば、語族の絆は多かれ少なかれ引き伸ばされるのだが、それがどの程度まで引き伸ばされた時に途切れるのかをはっきりさせることである。これを見抜くのは非常に微妙である。なぜなら、依拠すべき絶対的規則などは何もないからだ。本来的に言う語根や語基はもはや今ではない。と言うのも、それらを見出そうとすれば、太古の時代まで遡らざるを得なかったからである。」(Ibid., p. 963)したがって、「共通の太古の起源」たる印欧祖語は「ここでは分類に何ら関与していない」。

- (60) Ibid., p. 929.
- (61) Ibid., p. 921.
- (62) 『ノール』I. D. U., p. 374.
- (63) Ibid., p. 381.
- (64) 『英語の単語』O. C., pp. 902-903.
- (65) 風間喜与三『言語学の誕生——比較言語学小史』岩波書店《岩波新書》、一九七八年五四—五五頁を参照のこと。マラルメがブレアルの仏訳で(あるいは原書で)読んだかもしれないポップの『比較文法』は、「音と文字の組織」から論を起している。また、初期の比較学者の一人であるラスクにも「文字の変化から〔諸言語間の類似的〕諸規則を演繹できる」という表現が見出される。(Julia Kristeva: *Le Langage, cet inconnu*, Une initiation à la linguistique, Seuil, "Collection Points", 1981, p. 194.) この議論は「ト・ド・ブレアル」と同時代のマックス・モラーヴァ「言語学のイニシエーション」としてのアルファマンとユル・カサドに見出される。cf. Max Müller: *The Science of Language*, founded on Lectures delivered at the Royal Institution in the years of 1861 and 1863, in 2 vol., Longmans, Green and Co, 1899, vol. 2, p. 80.
- (66) *Corr.*, p. 319, N. 1.
- (67) 『英語の単語』O. C., p. 1047.
- (68) 『ノール』I. D. U., pp. 381-382.
- (69) O. C., p. 828.

(70) 『英語の単語』 *Ibid.*, pp. 922-923.

(71) 丸山圭三郎は、バンヴェニストのソシール批判 (Coent) という概念と *poet* という一連の音のイメージとの結びつきはフランス語の体系内では必然的であり、恣意的ではありえない) から論を起し、オノマトペや詩的言語における音声の象徴的役割などを取りあげながら、次のように述べている。「そこにはいささかの普遍性も自然性もない。〔…〕言語に用いられる音のイメージとその価値は、ガラスを爪でひっかく物理音や耳を聳する爆発音が言語の違いを問わず不快音として感じられたり、小鳥たちのさえずりや小川のせせらぎの音が快音として感じられたりするのは、全く別の次元から生ずるものである。〔…〕シニフィアンとシニフィエの間の関係は、いかにそれが『構成された構造』の中においては『必然的』であろうと、これは自然的必然ではなく、歴史的、社会的、文化的必然であり、したがって恣意的なのである。」(丸山圭三郎『前掲書』三〇五—三〇六頁) 他方、次のような意見もあることを指摘したい。

まずヤコブソンは、音と意味との動機付けされた結合の有無について、要約すればこう語っている。音素系列と意味との結合の唯一の必然的連関は隣接性にある。なぜなら、音素もそれを構成する弁別特性も、表意機能は果たすが、それ自体としては表意作用を欠いた、純粹に示差的・対立的な要素だからである。だが、弁別特性の対立的関係は、次のことを明らかにする。一、一方で、この関係の論理的性質上、対立する二項間の関係は恣意的ではなく必然的である(たとえば、長さは短かさを、鋭さは鈍さを、自らと対立する特性として含意している)。

二、他方で、この対立の間には連帯関係が存在する。ある弁別特性の存在は、同一音素内の他の弁別特性の、必然的もしくは蓋然的な、欠如もしくは存在を含意するし、また同じく、ある対立の存在は、同一音韻体系内の他の対立の共存を含意・許容もしくは排除するからである。

したがって、弁別特性の対立関係自体もまた、その恣意性を相当程度限定されているとみなければならぬ。

弁別特性が備えているこの純粹に対立的な関係は、音韻体系内での連関を構成していると考えられる。それは更に、言語の意味の側面にも影響を及ぼしている。なぜなら、これらの対立の各々は、神経生理学的法則に基く共感覚の作用を助け、その結果、音の対立は一定の感覚的対立を喚起するからである。これは、弁別特性の隠された内在的価値を暗示する。音と意味

との隣接性に基づく外的連関を、類似性に基づく内的連関によって補う可能性が、想定できるのである。「弁別特性の選別は、働いている音素の選別は、実際、純粹に恣意的なのかどうか、それともその選別は「…」——音声装置の使用の事実と同様に必要となる研究を示唆している。「音素や弁別特性の選別と相互関連とを説明すると共に、こうした選別と相互依存との根本原理を仔細に究明して、われわれが世界の諸言語の音韻構造の根底にある普遍的法則を確立・説明できるようにしてくれるのは、世界の様々な言語体系の類型論的研究のほかに、生成しつつある言語活動の構造分析——幼児ことばとその一般的法則との分析——であり、また他方、崩壊しつつある言語活動——失語症のそれ——の分析である。そして文法形式の構築を達成するために音韻手段が利用される、そのやり方の体系的検討が、ポードワン学派とブラハ学派とによって『形態音素論』なる名のもとに粗描されていて、言語レベルの階梯と各レベルの時効にかららない特殊性とを考慮しつつ、音の研究と意味の研究とのあいだに不可欠な橋をかけることを約束している。」(ローマン・ヤコブソン『音と意味についての第六章』花輪光訳みすず書房一九七七年一五三—一五八頁。)

言うまでもなく、マラルメは音素や弁別特性の概念など些かも所有していなかったし、このような研究など想像だにしていない。だが、ヤコブソンとマラルメとの決定的な差異は、形相としての言語という視点の有無である。マラルメの言語観は依然物質主義的であり、それだからこそあのような仮説が生じるのである。ところがヤコブソンは、音素と意味との内的結合を形相としての言語に内的なものとして確立しうる可能性を示唆しているのである。

次に、ジュリア・クリステヴァは、ヤコブソンとは異なる角度からこの問題に接近している。クリステヴァは、フッサールのな超越論的エゴに支えられた現代言語学が言語の記号象徴的秩序、つまり慣性化した構造としての言語の内部でのみ言語を分析しようとするやり方に批判を投げ、まさしくヤコブソンが示唆したように、幼児言語と精神病者の言語との分析を詩的言語の分析とつきあわせながら、そこには一致して次のような現象が認められることを指摘している。

一、言語外的なものが、言語に流入し、貫通している。

二、言語音は、音素として機能すると同時に、音素コードが設定する限界を超えて、前音素的レベルでも差異の網目を分節



している。

前音素的レベルでの音は、まだ音素ではない以上弁別価値をもたないが、その調音基盤に投資された欲動に裏付けられているという点で、また、この欲動の各々の音への置換によって一定の音声的価値を獲得するという点で、互いに差異化される。したがって、言語音は、音素である以前に、その調音基盤に投資された欲動の音声への置換（音声学的表現）であり、その欲動に規定された特有の音声的価値を担っている。通常の言語においては国語の音素コードあるいは形態音素コードが抑圧してしまう前音素的レベルでの音声と欲動との結びつきは、幼児言語においては、国語の音域やコードには規定されない言語以前のリズム、イントネーションとして観察される。また精神病者の言語においては、それはこれらのリズムやイントネーションあるいは舌語りの再活性化となって現われ、崩壊の危険にさらされた主体がしがみついた最後の拠所として働いていることが観察される。だが、詩的言語においては、まさしくこの欲動に裏付けられた前音素的音声的価値が、通常の制度的意味作用に抵抗しながらそれを貫通して、一方では音素を身体総体へと結びつけ、他方では音素を意味論化することによって、コードの限界を超えた新たな意味作用の構造を産出していることが分析される。この構造は、詩の音楽性、非意味、独自の文彩となって現われ、その結果、詩的言語は、その表面で語が国語の形式的規則に従って形成する意味作用と同時に、それとは全く異った前音素的音声／意味論的価値の結合に基づく意味形成装置を組織して、自らを二重化するのである。(cf. R. L. P. B-I, pp. 209-239; 'D'une Identité l'autre', dans *Polylogue*, Seuil, 1977, pp. 149-172.)

要約すれば、クリステヴァが主張しているのは次のような事柄である。

- 一、言語には、記号象徴的レベルと同時に、それから自立し、それを産出しながら、それに対する破壊ないしは過剰としても働く前記号象徴的かつ記号象徴貫通的なレベル（原記号的レベル）が存在する。
- 二、後者は、言語外的なものとしての欲動の場である身体へと言語を開く回路として、機能している。
- 三、したがって、言語をそれ自体で完結した形相的価値体系として捉えるだけでは十分ではない。言語外的ものがたえず流入しては、言語の中に自らを置換し、言語の記号象徴的レベルを侵しているディナミズムの中で、言語を捉える必要がある。したがって、ヤコブソンが言語の音的側面と意味との内的結合を言語の形相的価値体系内部で確立する可能性を示唆するの

に対して、クリステヴァは、この結合は言語外的なものによってこの言語外的なものと本来的に言う言語との接点に成立するのだと、はっきり主張するのである。「ごく早期に子供が母国語の音域を大いにはみ出した分節音を発音し始める」ということが確かめられてきた。「…」ローマン・ヤコブソンは、『まだ生物学的なものに錨を下している』このバブバブ音が、最初の言語獲得の《音素論的厳密さ》とは区別されると言明している。最初の言語獲得は、意味作用への傾向を有する以上、もはや《野蛮な音》をではなく《言語学的価値》を要請するから、というわけだ。だが、言語への入口で、子供は《意味を理解しないにしてもある音声学的差異》を把握することができる。類似の現象が失語症やある形式の精神分裂病にも観察されるなら、詩的機能は——より個別のかつより明白に言えばテクストは、言語のこの入口（原記号態／記号象徴態）に触れ、そこから言語を貫通する諸結果を引き出しているのである。」(R. L. P. p. 223-224) クリステヴァのこの主張には、ヤコブソン以上にマラルメの仮説に近いものが感じられることは確かである。彼女自身も、マラルメを高く評価している。「マラルメの根本的な功績の一つは、国語の体系に潜在する原記号的コーラに固有なこの《音声》の価値を見抜き、これらの音響的⇨欲動的弁別に基いて新たなテクストのリズム性を維持したことにある。」(Ibid. p. 225)「当時の詩人たちの中でも、マラルメは、言語音の記号象徴貫通的な《身体的》役割を最も明白に示した一人である。もちろん音素の《弁別特性》など一つも考慮してはいなかったが、マラルメは『英語の単語』の中で、言語の様々な音を身体の働きにてらして特徴付けている。」(Ibid. p. 226)「言語の音声的システムへのこの欲動的投資は、マラルメによるなら、たとえ最も深奥に埋もれているものであっても、言語の一般的メカニズムの特徴なのである。なぜなら、彼が言語の起源について語る時、この起源という用語は、常に不分明な形で、マラルメに『いかなる歴史的関係もたない』発生基盤としての《太古》を喚起するからである。」(Ibid. p. 229)

こうして、クリステヴァの言語理論とマラルメの仮説との間には、一種の類似が認められる。だがそれでも、両者を同一視することは厳に慎しむべきであろう。マラルメが彼の仮説によって論証しようとした事柄を、欲動理論が、またそれを援用したクリステヴァの言語理論が、明快に説明しうるのだとしても、そのことは、マラルメの仮説が受け入れ難いものであるという事実は何ら変更を加えるものではない。換言すれば、クリステヴァの言語理論は、マラルメの仮説が提起している問題に対する一つの解答とはなりえても、マラルメの仮説の解釈ではありえないのである。したがって、クリステヴァがその言語

理論にマラルメを、とりわけここでは『英語の単語』を些か強引に結びつけているとしても、そのことは、ここで彼女が彼の仮説に同意していることを意味しているわけではないのである。

(72) 一八七十年四月(日付不明)の書簡。D. M., tome VI, p. 441.

(73) 『ノート』L. D. U., p. 384.

(74) *Ibid.*, p. 381.

(75) *Ibid.*

(76) あくまで想像にすぎないのだが、『ノート』の“Un étrange petit livre...”に始まる断章は、「修辞学」に関するものではなかったろうか。(cf. L. D. U., p. 379) また一八七十年五月二日付マンデス宛書簡は、その頃準備されていた言語学の論文について、こう語っている。「ヴァリエは演劇に侵入しましたが、私も似たようなものをソルボンヌ向けに準備しています。それはボードレールとポーの記憶に捧げる論文です。もし、私が考えているように、私の垣間見ているものが正当なものなら、拒否はできないでしょう。」(Corr., p. 324.) これも「修辞学」に関する言及ではないかと想像される。しかし、もちろんこれだけでは何一つはっきりしたことは言えない。

(77) O. C., p. 828.

(78) 計画の年代を一八七二年頃としたのは、ジャック・ミシヨンの見解に拠る。(cf. Jacques Michon, *op. cit.*, p. 39.)

(79) O. C., pp. 1057-1059.

(80) Henri Mondor: *Autres précisions sur Mallarmé et inédits*, Gallimard, 1961, p. 69.

(81) *Ibid.*, p. 77.

(82) O. C., p. 1061.

(83) *Ibid.*, p. 1057.

(84) *Ibid.*, p. 1058.

(85) *Ibid.*, p. 1059.

- (86) 風間喜与三『前掲書』一三〇頁。
- (87) Max Müller, *op. cit.*, Vol. 2, p. 217.
- (88) 風間喜与三『前掲書』一九七頁。なおジーファースの『音声生理学の基礎』が公刊されたのは、一八七六年のことである。
- (89) 『英語の単語』O. C., p. 979.
- (90) *Ibid.*, p. 1049. 傍点筆者。
- (91) *Ibid.* 傍点筆者。
- (92) *Ibid.*, p. 910. 傍点筆者。
- (93) *Ibid.*, p. 901.
- (94) Max Müller, *op. cit.*, vol. 1, p. 85.
- (95) 『英語の単語』O. C., p. 1052.
- (96) *Ibid.*, p. 1053.
- (97) *Ibid.*, p. 1052.
- (98) *Ibid.*, p. 1053.
- (99) *Ibid.*, pp. 1052-1053.
- (100) *Ibid.*, p. 1053.
- (101) *Ibid.*, p. 1046.
- (102) 『英作文集』序文。 *Ibid.*, p. 1061.
- (103) だからこそマラルメは、文学的言述を集めた『英語の美』と並んで、『英作文集』では諺、俚言、慣用表現を集めるのである。オノマトペと反復語法については、『英語の単語』で次のように語られている。「語の意味作用と形式との絆が完全なものとなった結果、精神と耳とに対する成功という印象しかひきおこさないように思われることがよくある。しかし、それはとりわけオノマトペと呼ばれるものに多い。人はこう考えるだろう。美事な、ひよろひよろと長いこれらの語は、言語の他の語

との関係では劣った状態にある、と。(例外は、ゴート語の *WRITH* 以来ペンの擦過音を模倣している *TO WRITE* 『書く』のようなものである。)なせだろうか。貴族のように大昔からの称号がないからだ。何世紀か存在した後も、このような語は、何らの種にも属していないので、昨日生まれたように見えるのである。君たちの起源は、と人は彼らに尋ねる。そして彼らが示すのは、自分たちの正しきだけなのである。しかし、これらの語を馬鹿にしてはいけぬ。なぜなら、これらの語は、わたしたちの諸言語の中でおそらく最も最初のものであった創造の手段を恒久化しているからである。」(O. C., p. 920.) また、「ある子供っぽい習慣を学者用語で呼ぶなら反復語法というもの、これもまた諸言語の中で目につく役割を演じているが、この反復は *papa* や *maman* のような単なる音節の反復とは別なものである。英語では *CHIN-CHAT* や *TITTLE-TATTLE* を思い出してほしい。時によってはこの戯れは *PICK-NICK* や *HUMDRUM* 等のような真の頭韻法を実現してゐる。」(O. C., p. 973.) 反復語法を、この厳めしい学者用語に似つかわしからぬ子供っぽい戯れに、またオノマトペを、氏素姓の正しい貴族に対するに、自分を示すものとしては「自分たちの正しさ」をしかもちあわせていない、どこの馬の骨ともしれない民衆に、各々対比してみせるマラルメのこの語り口には、現用の諸言語を太古の祖語の墜落としかみない歴史・比較文法に対する少なからぬイロニイが読みとれる。この対比は、反復語法がその子供っぽい戯れのためにかえって真の頭韻法を、つまり言語の詩的音楽性を実現し、またオノマトペが「言語の他の語」にはない「語の形式と意味作用との完全な絆」を示していることを、鮮かに印象づける。したがって、これらの語を「言語を話す民衆それ自体の本能からまさしく出自した正当な語」(O. C., p. 920.) と認めることによって、マラルメが言おうとしているのは、歴史が達成した言語の現在の状態の豊かさであり、また、歴史的過去から言語の深層への、言語の発生的起源の置換(「諸言語の中でおそらく最も最初のものであった創造の手段の恒久化」)なのである。

(104) 『英語の単語』O. C., p. 919.

(105) *Ibid.*, p. 920.(106) *Ibid.*, pp. 1049-1050.(107) *Ibid.*, p. 994.

- (108) *Ibid.*, p. 993.
- (109) Cf. *ibid.*, p. 1027.
- (110) 『最新流行』, *ibid.*, p. 828.
- (111) 『ノート』, I. D. U., p. 384.
- (112) 『英語の単語』, O. C., p. 901.
- (113) *Ibid.*
- (114) *Ibid.*, p. 921.
- (115) 丸山圭三郎『前掲書』八十頁。
- (116) 同右八一頁。
- (117) 同右二〇—二二頁。
- (118) 同右二三頁。
- (119) 同右。
- (120) 同右二三五—三六頁。
- (121) 同右一四四頁。
- (122) 同右一四五頁。
- (123) 『英語の単語』, O. C., pp. 974-975.
- (124) *Ibid.*, p. 926.
- (125) ローマン・ヤコブソン「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」『一般言語学』川本茂雄監修 田村すゞ子他訳  
すゞ書房一九七七年 三六頁。
- (126) 『英作文集』, O. C., p. 1063.
- (127) *Ibid.*, p. 1125.

- (128) *Ibid.*, p. 1106.
- (129) *Ibid.*, p. 1107.
- (130) *Ibid.*, p. 1112.
- (131) 『英語の単語』*Ibid.*, p. 962.
- (132) ヤコブソン『前掲書』三六頁。
- (133) 『英作文集』O. C., p. 1109.
- (134) *Ibid.*, p. 1110.
- (135) *Ibid.*, p. 1111.
- (136) *Ibid.*, p. 1113.
- (137) ヤコブソン『前掲書』三七頁。
- (138) 『英語の単語』O. C., p. 972.
- (139) ヤコブソン『前掲書』三〇頁。
- (140) 実際、今列挙した、マラルメが英語の語彙及び文法に見出している諸特徴は、そのままマラルメのエクリチュールの諸特徴となるだろう。すなわち、シェレールがあげているような、動詞に対する実詞の偏重、不定詞の多用、複数形等の語尾変化の極度の拒否など。シェレールがマラルメのエクリチュールに対する英語の影響を明白に否定しているだけに、この一致は皮肉である。(cf. Jacques Scherer, *op. cit.*)
- (141) カザリス宛書簡。D. M., tome, VI, p. 468.
- (142) 『英語の美』は、文学的言述をそのような作業として読み解いている。たとえば、ベーコンについて、「美事な『エッセイ』は、諸事物の間に存在する類似のヴィジョンアナロジーに基づく直喩コメソレンにおいて輝かしくも豊かである英語から、その魅力を借りている。」(Henri Mondor, *op. cit.*, p. 84) またスウィンバーンについて、「スウィンバーンの永遠で壮麗な抒情の溶融は「…」絶対的な仕方では英語という言語と一体化している。この言語のあらゆる手段がそこにはあり、全く力強い直観によって戯れに付され

ているのである。頭韻法が与えるこれら絶妙なる照応の、一体何が残るだろう、ひとたび外国の国語への置き換えがなされてしまったなら。」(Ibid., p. 90)